

R 40.25

4 of 5

1115  
\* TESSAKU, TESSAKU SHA, Vol. 6,  
Jan. 1945

67/14

C



# 鐵 欄

第  
六  
號

新年特大号

1945



謹賀新年

高原短歌会

鶴嶺湖吟社

鮑ヶ丘俳句会

ツリレーキ美術学校

ツリレーキ交響音樂團

鉄柵同人

二〇〇一 A

六八〇一 C

二一〇一 D

七六〇一 B

八〇〇一 B

一〇〇一 B



# 鉄柵新年号目次

## 巻頭言

続・深夜私囁

十代田学

一

戦後  
キャンプの子供

二  
伊亜之雨

二  
十五

ジャナリズムに現はれた精神分析

伊亜之雨

十五

## 感想

愛憎録

伊藤 正

三十四

子供

田原重雄

四十九

安心・自由・幸福

富重利夫

五十二

文藝時評

二十二

思想時評

三十二

社会時評

五十八

隨筆 パチンコと子供

大山空夫

七十八

鉄柵

二十一

綴方教室

六十七

## 詩

私の旅

毛利水保

二十四

去年

市場美志恵

三十

若しも木があつたら

道 子

二十九

あした

加川文一

六十

高原の日

加川文一

六十二

## 歌

底 火

山城正雄

七十四

海 辺

雪村圭二

七十六

母のをしへ

白井園子

七十七

隔離所に再び年迫る

泊 良彦

七十三

高原短歌

(三十一名)

六十四

## 俳句

鷗嶺湖吟社

二十六

鮑ヶ丘俳句会

二十七

## 創作

母の行路

谷ユリ子

八十六

沈黙の輕蔑

水戸川光雄

九十四

流される者

野沢襄二

百二

木の節

山城正雄

百二十

懸賞小説選後感

八十二

読者の声

百三十九

編輯後記

百四十





二十<sup>七</sup>年

育て来た子祖に鋒を向け  
親は沖州住む世もあらう

子<sup>一</sup>子<sup>二</sup>

親は祖といふ流に民族



## 言 頭 卷

これで三度目の正月である。キャンプ生活して以来の過去を振り返り、過ぎ去つた日々如何に空しかったかを遠懷しても、明日の生活に向つて、今日をその日に生きてゐる情性を、別に疑はうとしない反省力の鈍さや、生活するに必要な競争心の沈<sup>よど</sup>澱を、拭しく思つてゐる。

キャンプ生活を思ふ度に私はシベリヤに流刑されたドストエフスキーを想ひ出す。四年間、零下四十度以下の牢獄の中で、南<sup>ミナミ</sup>京虫、亂<sup>ミドリ</sup>油虫に食はれつゝ、裸板二枚の寢台と足のはみ出る短いマントで震へてゐた苦難な徒刑的生活をつづけながら、兄に送つた手紙の中に「兄さん、この世には貴い魂をもつてゐる人が澤山ゐる。」と書き、「私は前には考へもしなかつた欲望や希望を今持つてゐる。」とまで書くことの出来た彼の人間として信じ難いほどの謙讓さに充ちた氣持を思ふ度に、こんな生活をしながら、自分よりも値打のない人間に侮辱されたことを氣に懸けてゐる自分を恥かしくなつて来る。

「物質的な移民地の目まぐるしい過去を振り返り、明日の自分の完成の爲に、自分の半生の中に、この静かな脱皮の期間——キャンプ生活——のあつたことを感謝したい。」と言ひ得る人は、こつ／＼と勉強してゐる人であり、さう言ふ謙虛な氣持でキャンプを遠懷し得る人間になれたらと思つてゐる。



盲目の如かず

盲聾哑の奴人聖者（レ）ケラ——女央乃

（レ）——三日間目が見えたら』と題して三日間  
の内にこれ——を見たといふプログラムの樹を、

おる、

無限大の周、永劫の静寂の中、  
指に觸る感、見ぬと通し人生を知り

社会を知り

——執着の裏面を透し——であるケラ——女央に



その同床眼を踏かたといふ其い何と  
云ふ驚きである

然し——う——女史は長い同床の中を歩そ  
今帰った計りの友人が女史の同に收をうて  
別に何もこれと云ふ程のものは見つかた  
と云ふと其く不思議かである

目を見る人は何と云ふ迂闊なことたる  
と云ふその、盲聾の女史は指に觸る  
感心見たりて木の葉から枝から——幹の





# 續深夜私囁

千代田 学

## キヤンプの子供

米國にやつて来て日本人の社会を訪れた時に第一に感じた事は日本人の小さい子供に夢とか子供の奇界の内容が乏しいと思つた事だつた。今日かうして隔離キヤンプ内で親しく子供達と接近して彼等と語り彼等と遊び、又彼等が何を夢見て居るかを觀察して見て、私の第一の印象の間違ひでなかつた事を思ふ。

日本でも米國でも子供には文化の内容の相違はあるが彼等の獨自の奇界なり夢なりがあるものだ。日本ならば寢からいお祖父さん、お祖母さん等から物語られる桃太郎の話、牛若丸と辨慶の話、浦島太郎の龍宮の話等、神話とか、お伽噺とか、子供が根掘り葉掘り聞きたがる話があり、子供は其等を聞いては色々の事を想像し、彼等の奇界を描いてゐるものだ。日本の子供達に大きくなつたう何になるかと尋ねると屹度言下に彼等の夢の象徴を逐事するだらう。夢に輝く大きい眼を動かせ下り、男の子なら大臣になるとか、陸海軍大將になるとか答へるだらう。サの子なら九條武子さんになるとか、又其の他の知名の人になるとか答へるだらう。子供に対する行事としても、日本の社会



では、端午の節句だとか、雛祭だとか、棚機祭、さては郷土の氏神祭の年中行事の教々がある。それ等のお祭には子供達は社会的な習慣によつて情緒的に育まれ、彼等の世界を豊富に彩り盛られてゐる。我々の子供時代を思ひ出して、お祭を中心として、色々楽しい思ひ出が回想され、あの頃の自分達の世界を回顧して懐しく思ふ事がある。誰かが思ひ出の無い人は淋しいと云つたが、年寄つて過去を振り返つて見て、子供の時代に豊かな思ひ出と、潤ひのある世界がない人は確かに淋しい人だらうと思ふ。

子供達は段階として豊かな子供の世界を完全に通つて文化的に成長して行くものだ。

翻つて我々隔離キャンプの子供達はどうか。不幸にしてそれに乏しい様に見受けられる。いや子供の世界等一般父兄には見向きもされ居らぬ様だ。子供達も日本の子供達と同じ様に通り一遍の神話なり、お伽噺、さては日本の歌、時季々々の行事に就いて日本語学校で聞いたり教はつたりして歸る。併しそれ等の事は自分達に縁遠い外國の事務的な話でも聞いてゐるかの如く、深い関心と愛着の念をよせて居ない様である。彼等の世界には何處迄も大人のモデルが力強く、キャンプの演藝会、その他の会合、行事を通して入つて行つてゐる。子供は子供の世界にそつと靜かに温く世話して呉れ、周囲が保護して呉れないのだ。子供の心理發育過程で一番影響を受ける母親でさへ毎日の習ひ事に家を空け、父親は言はずもがな、キャンプの政治問題の論争、ゴシップの詮索に忙しく、子供に対する考慮よりその方がより重大なるかの如く見受けられる。子供は國粹的意見が高く叫べれ、日本人らしい日本人に教育すると云ふ社會の努力



具合から鮮かに自然の美妙さを知り  
と觸れた枝の震動で、鳥の鳴き聲を感ず  
てゐるである。

觸れる丈で、ふにも、やが得るものだから  
視力があるたらと、ふにか、多くつゝ、夫の見える  
だ。——かと、歎く、さうである。

三日、同目が見えたらと、世は、口見た、もの  
教を、斯く、思ふ、てゐる。

予日は、先づ友人、の、顔、人生の相剋を知らぬ



真心の赤ん坊の顔。女史を信じ切つた忠犬  
の目。本林の中へ自然界の心頭  
夜が晝に変わる時。幸福の  
人間の進歩の姿と見え、為に博覧館、  
オニの藝術と通して人間の魂を見、為に  
美術館、劇場  
オニの目。人生の精華を味ふ為に都心の  
街と歩いて  
行人の移々ふ姿。老情を見、そこから人間  
社会を見透し後……と云ふもの



にも係らず、教育心理学で云ふ「放任兒型」、子供に墮する傾向が濃厚である。

子供の知的内容としても、環境の狭い影響の爲乏しく、キャンプの子供にとつて、家の觀念と云へば、奇妙なボーチをベタ／＼打ちつけられたバラック長屋以外には無く、動植物に対する觀念に於ては、牛馬一匹居らぬ、又木一本生えて居らぬキャンプ生活では、空氣に近いと云つて良い。此のセンターに生れた我が子から柵外を歩いてゐる馬を見て、大きい犬が居ると云つてやい／＼騒がれてハツとする様なことだつた。之等は環境から来る乏しい子供達の知識の外界を物語つて居るものではないだらうか。何時の頃だつたか、隔離センターになる以前、此のセンターにもリッルシアターと云ふ小供向の劇團があつて、子供にも大人にも随分喜ばれてゐたものだ。その頃は左程、その劇團が持つ價值とか、意義なりを深く考へた事はなかつたが、キャンプ生活の長引く今になつて見ると、そんなものがもう一度組織されて、子供達の情操教育の刺激にでもして貰つたらと思ふ。劇團ばかりでなく、子供達の知識なり、感情を養成洗煉する意味で、C・A辺りで子供向きの教育映画をしば／＼やつて貰つたり、又乾燥無味な此のキャンプに充分なことは望めない迄も、W・R・Aに交渉して小さい動植物園でも造つて貰つたらどれ程子供達は幸福か知れない。二万人の人口を擁する此のセンターである。色々の人々の考へを求めれば余り經濟的な負擔はしなくとも、子供達の情操を育くんで行かれる計画も立てられるだらう。

大分以前の事だが、フライリッピンの收容所から交換船で歸米した人の收容所手記とい



つたものを何かの雑誌で読んだ事がある。先方でもクリスマスに子供達を喜ばせる爲に充分なことが出来ないで、子を持つ親達は各々附近の山に木を切りに行き、それと色々な玩具を造つて、ペイントし子供達にクリスマス・プレゼントとして贈り、又收容所の中央部にクリスマスツリーを立てそれを飾つて子供達をその周りに集めてクリスマス・ソングを合唱し、子供達を慰めたといふことだった。同じ收容所生活をした我等の子供達に對する温い心を思ひ、此のセンターの子供達を思ひ何か比較して深く考へさせらるゝものがある。

## 戦 後

戦後歸國して何をしますかと氣紛れ乍ら、逢ふ人々に尋ねて見ると、甲の人は戦後は戦後の事だ、その時が来て見ないと分らないと云ふ。乙の人は歸國したらどうせ内地には住めないでせうから滿洲へでも、支那へでも、それとも南洋の新占領地帯へでも、再移民として出て行くのですねと答へる。又丙の人は同じ事を尋ねて見ると、自分は何々先生に歸國後の一切の身の振り方は一任してあるから歸國後の生活に就ては何も心配して居りませんと云ふ。ではその先生とは何方ですかと尋ねると此々の人だとその人の名を挙げ人物紹介する。

成程甲の人の言ふ様に戦後の事は戦後の事に相違ない。それには條理が立つてゐる。



そゝ再び永劫の闇が私を襲った時

私は初めて見残してしまつたもの、多分、のになみづく  
であらう……と云ひ

目の見え人達の迂闊さに対して（この目の私から）  
一言も上げない事がある」と云ふ。故言を  
を投ずつけてみる。

目の見え人達と幸福と苦悩にしちゐる、  
毎日は目が潰れると思つて、其の剣に目と狭い、  
明日は目が潰れると思ふ、心とこゝろで獨唱の事  
を南の鳥、歌ふに聲を聴くし



オークストロウ、雄壮な曲に耳を傾けたい  
 明日から旬の味、解らなくともいいで  
 感じていることを感觸——花と葉——  
 食物の一日々々と葉——ささい……と  
 迂闊に——面おも悲しみを発見悲しみを  
 聞き悲しみを言ひえ——悲しみを  
 感觸す。目と耳といふと感觸見に吸い  
 込まれる……である。



戦後の事を今から兎や角言つて見たつて、社会の狀態は刻々に變動して行くのだ。今から幾年か先に終るであらう戦争の後の事を考へたつて計劃は立たない。その時になつて時機に即した方針を徐ろに立てやうと云ふのである。問題はその時期に直面する迄準備しなくとも經濟的の恐威もなく、帰國後は自分の貯へか又は特種の自分の教育とか又技術とかで立派にやつて行けるか否かに依つてその條理も正当化されるのではないだらうか。さもない人は今から自分の志す方向にコツ／＼と準備してかゝらなくてはならないのではないかと思ふ。

乙の人の言ふ様に呑氣な而も生活豊かな米國から日本へ歸れば暮し難いには相違ない。だから滿洲へでも、其の他の土地へでも再移民として出ようと云ふ事は認識不足から来る矛盾の様に思はれるし、悲痛な響を含む言葉の様にさへ感ぜられるのだ。海外に再移住すれば内地の生活より樂だからと考へる處に甚しい認識不足があり、余りの樂觀がある様に思はれる。滿洲移民に関する調査報告書が企劃院から出てゐるが、米國の同胞の空想する様な樂なものではなく、滿洲のバイオニアも随分惡戰苦闘してゐる様である。勿論計畫通り順調に行つた朝陽屯、連珠山、黑台、そして綏遠等の移民村もあるが、それと對照的に永豐鎮、湖南營の移民村とか天照國農村の如く自然的環境も恵まれず、營農計畫も確立せず資金の欠にも不如意の点等あつて成績の掣らなかつた慘めな處もある。移民村の建設の成功不成功の批判はさて置いて、報告書の條々の間に滲む拓士の苦闘、辺境の地に防人として國策の線に沿つて人柱とな



ると云ふ氣迫と信念には坐る頭の下るものがある。匪賊の未だに横行する天涯孤獨の地に匪賊の兇彈に傷き乍ら、風土病と戦ひ、北滿の酷烈な寒暑に耐へ乍ら自給自足の移民村を建設して行かなければならぬのである。自家労力中心の自給自足とは、唯單に食料品のみの生産ではない。建物、家財、什器、薪炭の類より衣類に至るまで自給自足すべく希望せられ指導されるのである。

移民現象の法則として移民現象は低い水準の經濟的地域から高い水準のそれへと移動して行くものとされてゐる。在米同胞の場合には將に移民現象の法則を逆流して行くの感がある。今生活の水準の高い米國沿岸の地帯で二十年三十年と安易な生活に慣れて来た同胞が、百八十度のコペルニカスの廻転をして自給自足の移民村に飛び込む事に就ては國土的信念と、辛苦艱難何處迄も荆棘を切り抜けて行く覺悟が無ければ出来なない事だ。問題は其處に歸着すると思ふ。滿洲でなくとも、支那南洋地方と云へども同じ事が云へるのではあるまいか。生活程度の低い苦力とか南洋土人とかに對し勞働的に太刀打ち出来る日本人の生活の標準ではない。南洋開發会社に於ても移民を使用して居るラインは特種技術を持った人達で、例へばマニラ麻を栽培するとか、土人に依つて生産されるものを加工する熟練工の人達であるとかである。單に勞働だけの事であれば低賃銀の土人を使用すれば足るのである。それとも、巨大な資本を政府との諒解の下に投じて、資本家の立場でその土地に行くと云ふ事はあり得るのである。

要するに一頃しきりに云ひ囃された、歸國すれば日本政府から一人宛一萬圓の賠償金



を附與される式の荒唐無稽の夢を描いたり、南洋及び支那大陸へ渡れば、沃野千里、日本移民を雙手を挙げて歓迎してゐるとか、取り留めのない妄想を止めて、もつと現実的な考へ方をしなくてはならぬと思ふ。新天地は日本人の手に依つて開發されるべきものでない。開拓には開拓に動員されるべき技術が必要であり、拓士として如何なる困苦にも耐へる体力、並びに精神力も必要である事は言を待たない。滿洲の移民の跡を見て政府の計画不充分の爲思はざる移民の苦難を招いた事もあつた。又移民の技術的知識の乏しい爲に充分の生産的成果を挙げ得なかつた事もあつた。自給自足の移民村は農業牧畜兩々平行して經營されるべきものであるが牧畜の方面、特に家畜の加工方面の知識、並びに機械類操縦の經驗に到つては日本農村出身の移民には缺けてゐた。滿洲の農業は内地の様な極度に集約化された農業ではない。どうしても大農式に機械化された經營法でなくてはならぬ。此の意味に於て科学的な知識が要求されるのである。支那南洋方面に就いても、同地方を視察調査して来た人々の談を聞いても同様な事が繰返されてゐる。終りに丙の人の答へであるが、自分は何時も此の種類の事を米國の日本人社会で聞かされる度に嫌な思ひをさせられる。日本ならば社会の批判力が強く、大した人物でもないものが誇大妄想的に大風呂敷を振つたつて問題にされない事が、米國の日本人社会では平気で通用され勝ちなのである。特に今迄外部の社会で築きあげた經濟的地盤も根こそぎに覆へられて此のセンターに入つて来た日本人には將來に対する生活



の不安と永く祖國を去つて、祖國の社會の変動に対する恐怖心から来る潜在的な依頼心が強くなつて来て居る事は否定出来ない。その弱さに付け込んで、俺に附いて来い日本の生活は自分が保證すると云ふ山師的な言葉を籠する者を自分は心から憎むものだ。その目的は經濟的な處にあるのか、政治的な茶邊にあるか知らない。併し歸國すれば大言壯語して来た者自身、つてからつてを求めて東奔西走自身身の身の振り方から運動しなくてはならぬ人間ではないか。殘さず取り巻き連はどうなるのだ。無知だからと云へばそれ迄だが、そう云ひ放せない悲劇をさへ此の返事の中に感ずる。

要するに自分の歩む道は苦しからうが、淋しからうが自分独りで踏みしめて行かなくてはならない。さもなければ、將來歸國してドネを踏む様なことになるだらう。重箱の様に積み重ねられた階級制度の強い日本の社會である。大學出の学士が電車会社に入れば、手に切符を持つてチン／＼と鈴を打つ車掌から始めなくてはならぬ社會である。銀行に入れば受付口で一年は封筒に住所ばかり書かさずして順々と昇進して行く社會である。職場を守つてどん底から叩きあげた覺悟がなければ、安逸な米國に残つた方がよいだらう。今日まで如何に貧しい生活をしてゐても飯が喰へなくて人が死んだと云ふ事を日本では聞かない。淋しくとも辛くとも明日の日本の生活を夢見つつ着々とそれに対する準備と勉強をして欲しいと思ふ。祖國の社會では下詰の生活から上に昇る道は開けてゐるのだから。





ジャーナリズム  
に現れた

## 精神分析

伊亞之雨

北方の暗雲の下には砲声が轟き渡つてゐた。しかしテントの中にゐた人々は砲声には無関心だつた。彼等の視線は明るい光の下でびく／＼とひきつり、静かに啜り泣いてゐる手術台上に横たはつた二十才の兵士に惹きつけられてゐた。医者が腕捲りしたその兵士の右の腕に優しく針を突きさした。そして注射器からは徐ろに黄白色の液体が静脈の中に注入された。

九十秒の後にはその兵士の神経的な痙攣と啜り泣きは止んでゐた。彼の面には微笑すらあつた——幸福な酔つ搦ひのあの空虚な夢見るやうな微笑が。一滴々々注入されるその液体の入つた注射器のことも忘れてしまつた兵士は天井を凝視し、間の抜けた様にくす／＼笑つた。其の時、医者は上体を曲げて口を兵士の耳に近づけて大声で言つた。



「君はもう想ひ出すことが出来ない。さうだらう？あの炸裂する砲弾の音も、機関銃も、不気味な音響も忘れてしまつたらう。さうだらう？」と。

手術台上の青年の面には又夢の様な微笑があつた。彼の口は開かれ又閉ぢられ、そして恰も大きな努力を以てする如く「イエス」と答へた。それから彼は医師の勇氣附ける様な質問に答へつゝ、自分の事を語り始めた。

その兵士の故郷はペンシルベニアの農園であつた。入營して一ヶ年になり、前線に三十三日居た。二日前の戦闘で、彼の小隊は少し前進し過ぎた爲、突然烈しい機関銃火線によつて孤立させられた。それから砲撃が始まつた。幾時間もし、晝夜引續いて砲撃された。彼の戦友は血みどろになつて、目も當てられぬやうな姿でバタ／＼と殞た。併し彼は不思議に無傷だった。だがそれから援兵が来た時に彼は歩くことも話すことも出来ないやうになつてゐることがわかつた。彼は唯震へ、靜かに泣くことだけ出来た。

医者の手にあつた注射器から捲り上げられた腕の中に液体がすっかり注入され、注射器は空になつてしまつた。そしてその兵士の物語はきこえない呟きで終り、眼は閉ぢられ、彼は眠りに落ちた。

X

X

X

右の文は、クレイ・ゴウランといふ記者がイタリア戦線から送つた新聞記事の



一部を採ったものである。ゴウランは続けて言つてゐる。右の様な兵士は、第一次世界大戦の時だったら、大抵癡呆症になつて帰還兵病院の癡呆症室で一生を過ごすやうになつたであらう。だが、この兵士は八日後には癒て再び兵務に就いた。

戦場の恐怖によつて精神に異状を来してゐる者は、先づ右の様な手当を受けるのである。特別に調査されたその液体を徐々に静脈を通して注入すると、患者を眠らせないで而もその氣持を完全に弛緩せしめるのである。かうして半睡半醒の状態になつた時に精神病医が色々な質問を發してその患者の悩みや恐怖を口に出して言はせるのである。胸の奥深く秘めてゐたことを何の抑制もなく吐出してしまつたその瞬間から、患者は恢復の道を辿るのである。この療法の秘訣は、だから精神異状になつてゐる者の胸底に潜んでゐる恐怖や煩悶や抑壓觀念を、巧みに誘き出して、恰度身体が生理的な汚物を排泄するやうに排泄せしめるのであるが、勿論それにはその爲に特に訓練を受けた精神病医のみなし得る仕事である。色々な抑壓觀念を言動に表現しないでそのまゝに放つて置くと、自家中毒を起してヒステリーになつたり、其の他の精神異状を起し、肉体的な苦痛を起すこともあるといふ學説は新しくもなければ珍らしくもないのだが、特にフロイドによつて有名にされた精神分析學の治療法的應用がこの様に劇的に實行されてゐるのを読んで一寸氣を惹かれた。



戦場で精神に異状を起した者を此の方法で調べて見ると、間には、後に残した悪人の事を心配して変になつた者や、家庭の紛争を心配して異状を起した者も居り、表面上心身には異状が無くても頭痛を訴へたり、身体のそこここに痛みを感じずる者も居るさうである。

重患の場合は三日位半睡半醒の状態に置かれることがあり、その間に戦場の出来事をすっかり忘却せしめて後、一週間から十日位の再訓練を施して再び戦線へ送る。かうして戦闘による精神異状の七割五分は快癒されるさうだ。と同じ記者が報道してゐる。

X

X

X

スタインベックの「怒りの葡萄」に出るアンクル・ゲヨーンは、時々強酒をあふつた。若い妻が腹痛を訴へた時に、ジヨーンは、「食ひ過ぎだらう。」と言つて医者と呼ばなかつた。妻は盲腸だつた。そして大変苦しんで死んでしまつた。それは幾年も／＼昔の事だつたけれども、それを思ひ出すとたまらなかつた。そして酒屋へ走つた。アルコールによつて脳の抑制作用が麻痺すると、アンクル・ゲヨーンは告白する様に過去の事を語らうとしたが、それは人々に煩さがられるだけで、同情的な聴き手はなかつた。アンクル・ゲヨーンのアルコールへの憧れはとう／＼なほらなかつた。



リーダスダイゼスト誌の十月號に、アルコール中毒の矯正に就いて興味ある記事が出てゐる。アルコール中毒者は、酒に酔はねばならない理由を持つてゐる。極端な内気さに打ち勝たうとして酒に酔ふものもある。何事かに失敗して酒に走る者もある。さうした中毒者は街でビツクアツプされて監獄にぶち込まれても、何にもならない。又同じことを繰返すばかりである。もつと根本的な矯正法が社会的にも個人的にも必要である。それは患者と胸襟を開いて語り、患者に自信を取戻させ、恐怖を除き、社会の人々に接し、社会に対する責任觀念を持たせることである。それから、若し借金でもあつたら、それを返却せしめねばならない。そして失敗だつた過去は全部忘れ、未来に対する恐怖を捨て去り、勇氣と希望を持つて現實に直面するやうに仕向けるのだ。これはニューヨーク市の新しく出来たアルコール中毒治療部の根本方針ださうである。此處にも、人々の潜在意識の毒界にまで掘り下げて、精神的な異状を治癒しようといふ試みが見られる。抑壓された感情は何處かで何時か排口を求める。それを素顔で吐き出せないのがアルコールの助けを借りようとするのだ。訓練された専門家が、誠意を以つて患者の煩悶を聴いてやつて、患者自身でも気づかないやうな悩みを信頼を以つて吐露せしめ、そこから人生の再出發を促すのである。

X

X

X



「大多數の病人は、その病狀をもたらずだけのけつきりした肉体的な疾患を持つてゐない。」とは二人の医科大学教授が昨年著した医学書の中に證明を試みてゐる一つの結論である。サイエンス・ダイジェスト誌の十月號に出てゐるその要約によると、

仕事の上で又は社会的な或は家庭的な長い間の不満足が不健康の原因になることがある。さうした環境に対する不調和は、その人の性格の上に現はれることもあるし、又身体の何處かに假性的な病狀を呈することもある。或は又、憂慮に襲はれたり、強迫觀念や恐怖症や憂鬱症等の精神異狀を起すこともある。そんな場合、若しその精神的興奮を言葉や行動に表現する機会が與へられなかつたら、肉体がその興奮を發現する道具になるかの様である。例へば、肉体的には何等の疾患が無くても、自分の環境の何物かを受入れることが出来ないうで、それを嘔氣を催すことによつて外に現はすことがある。溜息をつくやうな呼吸をして、胸を壓へられやうな苦痛を感じると言ふ病人で、何も身体的な缺陷が見出せない場合、患者は誰かに訴へずには居られないう「重荷を胸に持つてゐる」ことが屢ある。食慾が減退して營養不良になつてゐる患者が實は恰度その身体が食物に飢ゑてゐるやうに、その精神が愛情に飢ゑてゐるものであることがある。出處のわからない精神的な興奮が、筋肉の痛みとして現れたり、型に嵌つてゐない神経痛となつて苦しめることがある。誰かを殴りたくても殴れないで、腕が痛み出すこともある。



る。精神上の苦惱が高血壓となつて身体に現れ、その惱みが取除かれると同時に、その徴候が消失することもある。自分の環境に対する不満を恰もその環境の殉難者であるかの如く自分の体を搔くことによつて解決することもある。

X

X

X

精神異狀に就いて独特な研究をして、精神病学や精神分析学に大きい貢献をしたフロイドの学説に密接な関係を見られるやうな記事が同じ月に幾つも見られたので、面白いと思つて纏めて見る氣になつた。何れも、人間の複雑な心理現象と、心理現象と肉体の關係を研究して得られた原理を應用して、我々の精神的な悲劇を科学的に解決しようとしてゐるのである。加特教の神父の前での告白や小乗佛教の禁慾主義では救はれないと教へた大乘佛教の教へなども、フロイドの様に科学的な證明や理論は與へなくても、同じ原理を利用して我々を煩悶から解放しようとしてゐるのである。と言へよう。大震災の時に死んだ厨川白村は、フロイドの「性的渴望」<sup>リビドウ</sup>一點張りて文藝を説明し、藝術的活動は總て、创作者の胸奥に潜んだ蒸氣機關の様な猛烈な突進性を持った「性的渴望」<sup>リビドウ</sup>が淨化され、昇華されて詩となり小説となりその他の創作となつて表現されるのである。そしてその過程に於ては恐しい葛藤があり、煩悶がある。白村はだから藝術活動は「苦悶の象徴」だと言つた。「苦悶の象徴」にはまだこれ以上色々な事が書かれてゐたと思ふが、



本が手元に無いので是だけしか書けない。併し是だけでも、我々の潜在意識の領域に壓へつけられてゐる性的渴望の排口が文藝の中に見出されるのだといふ論據が成立するといふことは領けると思ふ。尤も、かうした論據は、「性的渴望」にとつては大きい名誉であつても、藝術には大いに不満足があるかも知れないが。

X

X

X

心理学者でもなく、フロイドを深く研究した者でもないのだが、これまでに、其處此處で讀んだり聴いたりしたフロイドの説から受けた印象によると、人間の心は常識で考へられるやうに單純ではない。併し又その複雑さは、常識や宗教で教へられるやうに神祕的なものでもないやうだ。その複雑さの中に、自然現象の中に見出せる法則のやうなものがあり、我々はその法則を利用して、或種の精神異狀を療<sup>イ</sup>することも出来、又色々な社会現象を説明することも出来るといふ様に論ぜられてゐるやうである。それから又、我々は人間の生理現象が絶えず呼吸し、咀嚼し、吸収し、排泄しながら続けられるやうに、その心理現象も、非常に複雑な活動のうちにあり、而も、それは恐しい突進性や爆発力を持つものによつて絶えず押し進められてゐるものであつて、それを無活動状態に押し込むことは、死を意味するものである。生きてゐる間は、何等かの形で表現されなければならぬ。それは意識的に表現される事もあるし、又建設的な表現ともなり、破壊的な



表現ともなる。精神的に現れ又生理的にも現れる、といふやうに結論されてゐるやうである。

で、序にその学説をもう少し覗いて見よう。

我々は普通、少くとも自分自身では統一された意識を持つて居り、自分は今何を感じ、何を考へて何を行爲してゐるかよく知つてゐると思つてゐる。しかし、精神分析学の一著書にある学者達の分布図によると、我々の意識の占界は極めて狭い領域を占め、心の大部分は無意識の占界によつて占められてゐる。即ち我々の精神界の約七分の五が無意識の領域に屬し、他の七分の一は豫備意識の領域としてとられ、僅かに残りの七分の一が直接に自覺してゐる意識の領域になつてゐる。豫備意識の領域とは、友人の名前や経験した事柄等の様に努力によつて意識の中に呼び戻すことの出来る部分の事である。(しかし私は日本で此の術語が何と呼ばれてゐるか知らない)言ふまでもなく此の様な分布は正確に計れるものではないが、しかし無意識の領域が我々の精神生活の重大な部分である事はわかつて思ふ。この無意識の占界といふのは、自分で思ふやうに想ひ起せないけれども、心の奥底にあつて夢に現れたり、催眠術や、他の実験的方法によつてのみ導き出されるものの潜む占界である。知らず識らずのうちに我々の性格に大きい影響を與へる一種の目に見えぬ怪物の巢く占界である。よく導かれれば偉大な仕事をし、偉大な人格の推進力ともなり、又一旦間違へば自らを亡し、他を誤らしむる



恐しい破壊的突進力ともなるものゝ住むところである。だから無意識の領域は、一種の掃き溜りでもあれば生命力の源泉でもある。意識界と豫備意識の古界から未解決の心の問題が掃き落される。そしてそれは再び外へ出なければならぬ。そこに悲劇の可能性が潜んでゐる。意識の古界と豫備意識の領域と無意識の古界は態々古界だとか領域だとか言ふ言葉をつけてゐるやうに精神的活動の起る眼に見えない「場」である。この三つに分れた「場」の中に三つの自我が住んでゐる。その一つは、自己を意識してゐる一種の智性であつて、なか／＼悪賢くもあり、利己的でもあり享樂的でもあつて、時間と空間と、社会的、物質的環境のうちに、常に自分を心ゆくまで満足せしめようと狙つてゐる油断のならない「自我」である。これは、意識界から、豫備意識や無意識の部分にまで働きかける力を持つてゐる。善悪觀も道德觀もない低いこの「自我」を壓へつけて我々を文明化する高尚な「超自我」は、個人を社会人にする爲に常に調和を責む一種の良心であるが、勿論、これは個人々々によつて發達の程度が異つてゐる。超自我はイッド（Id）と名稱されてゐる「潜伏自我」（これは私が勝手につけた名目だからそのつもりで……）にも屢恐しい壓迫を加へるものである。この「潜伏自我」は無意識の奥深く潜んでゐる盲目的な力であつて、我々の精神的エネルギーの源泉である。「潜伏自我」には先を見遠くす智性もなければ、結果を考へる思慮もない。故に破壊的力ともなり、創造的な力ともなる。愛の發動力ともなれば、憎しみの源ともなるものである。



我々が人間として生きて行く間——と言ふことは、他の人間の間に混じて生きて行くことであるが——我々は絶えず曲りなりにも、物質及び社会的外界とのバランスを保つて行かねばならない。その爲には、右に挙げた三つの自我や外界的現実の間に絶えざる葛藤が続けられる。そのバランスは絶えず破られひつくり返される終結の無い過程であるが、各人の持つ個性だとか性格だとか人格などと言はれてゐるものは、さうした経験過程の中につくられて行くのである。しかし、それは我々が今言つたバランスを保つてゐる場合であつて、例へば、習慣や道徳の強い壓迫との猛烈な内部闘争の後、精神異状や自殺によつて解決されることもある。又さうした内部闘争が、天才となつて発現されることもあるが、普通には、常態的なバランスをとり戻して、唯、人格の成長或は変格的性格となつて生の戦ひを続けるのである。

我々の意識せる自我は案外に卑怯で、解決し難い問題や不愉快な事柄があるとそれを未解決のまま、無意識の吾界に抑壓してしまひたがる。そこに精神的な障碍の起る原因がある。さうした障碍が起らないやうに安全辨の働きをするものが必要である。この文の最初の例は、永久的な障碍が来たらんとした時に安全辨を開



いたのであり、アルコール中毒患者を醫すのも同じ原理であり、第三の 心の悩みから肉体の機能的な疾患が起る事があるといふ境もこの療法を暗示してゐる。

×

×

×

總ての科学的な学説がさうであるやうに、フロイドの説も多数の敵を持つてゐるさうである。此處には別にこの学説を正しいものとして取扱つたつもりではない。だが、この学説を想ひ出させるやうな記事を幾つも見たので、それをフロイドの説に結びつけて見たまでである。

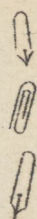
——一九四四・二・一〇——

## 鉄 柵

「鉄柵」は英語で何と言ひますかと問はれた。F.B.I.に呼び出されて訊問を受けた時のことである。「フエンス」だと答へると、どんなフエンスかと訊ねる。キャンピングをぐる／＼圍つてゐるフエンスだと言ふと、どんな意味かと突込む。キャンピングを表徴して、つまりキャンピングのことですと答へた。すると、スタックード(STOCKADE)は日本語で何と言ふかと、日本語を知つてゐる僕の白人に尋ねた。「留置場だ」と答へると、君は黙つておれと睨まれた。二週間後、「鉄柵」の原稿を検閲するから一応持つて来てくれと、情報部のビーゴロ氏から手紙が来た。その中に「鉄柵」のことをアイロニー・フエンス(IRON FENCE)と訳されてゐる。なるほど名訳だと今もつて感心してゐる。



## 文藝時評



〇〇氏に向つて中川卓氏が「アメリカでは文学は出来ないね」と語つた言葉の意味を私は時々考へることがある。私にはそれが判るやうな気がする。文学が環境から生れ、環境が如何に大きな働きを文学に與へるか、文藝思潮が時代と環境をその中樞として問題にするのか、らして、我々の環境を観察する必要を感じて来る。勿論移民の畀界である。習慣と言語の相違からこ

の地に未だ深い根を下してゐなかつたし、故國の傳統をそのまゝ移植するには、あまりにも若く我々は渡米して来た。思想、生活、教養、理解、あらゆる点に於て、我々は兩國の文化水準から疎略され、自分達が空洞の中に残されてゐるのも知らずに生きて来た。物質的な生活の豊富さがあり、労働後の家庭の平和もあつたが、主觀のもつ風景の中には広漠な沙漠と大陸的な「加減さ」が過渡期の我々の若さを蝕んでゐたにすぎない。文学を語ると言ふ上品なものそのものにも、鑑賞者の平凡な喜びを語るにすぎず。創作する喜びや意欲や、眞実な人間の姿を探求し、内省的な思索の痛々しさを語る立場から、果して何人が眞摯な態度で文学を語つたであらうか。かういふ環境の中でかういふ人間——感傷的な乙な文句をもつともしく綴つたからとて、文士と思つてゐるおめでたい人間——と同一視される。されるよりも自分も同じ言ふ氣分に浸り、さういふ程度の人間を求めて語る頽廢さを感じ



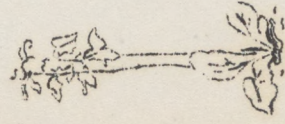
じて、中川氏も迷懷したに相違ない。

文学が藝術であり、この藝術と名のつく素晴らしい夢に、小手先の器用さといふ素質と、趣味といふ心構へから——何故文学者の多くが自ら生命を断つかの疑念さへも懷かず、その程度の認識から——やられると、文学といふものが安っぽい遊戯に見えて仕方がない。そこら辺りで子供が遊んでゐるマールブル見たいな……。

我々の荒涼な環境の中で、酸っぱい感傷のみが文学への動機であり、文学

のもつ内容のすべてであつた。一人の歸米ニ吉が米國にやつて来る。彼は若い。夢も憧憬もある。誰から貰つたか知らないが、彼は角帽を被つて街を歩いて見る。日本ではハ公熊公の娘なり、さあ大学生だなんて惚れて来るかも知れないが、ニ吉娘はなか／＼貰一には惚れてくれない。話したくとも英語は知らない。そこで妙なところで袖を引いてみる。「TIME IS WASTE TIME」とやられる。そのやる瀬ない感傷の捌口を文学に求める。文学こそいい面

の皮だ。だが昔間はもつと盲目だ。さういふ人間を文士と見るらしい。文士は髪を長髪にして見る。同人雑誌に何かを書く。成程創作らしい恰好をしてゐる。「創作」とちやんと書いてもある。そこで自分以下の教養ある人間に寝められたことも忘れて、嬉しく満足する。眞珠灣以前、こんな人間が文士と言はれては幾人も現はれては消えたのである。中川氏は今日本にゐる。







# 私の旅

毛利 水保

私のスーツケースには

仕事着と

ただ一着の外着だけです

私はそれで満足してゐます

けれども、たった一つの小説が書きたいばかりに

私はそのスーツケースを提げて

又、旅に出かけます。

好きになりかけた女とも別れてしまつて

淋しい青春ではありましたが  
私には血で書かれた記録です



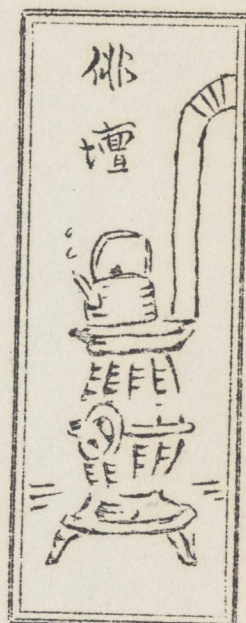


そして、この記録に終止符を打たうとせず  
私はこれからまだ  
私の旅をつづけるのです。  
貧乏と闘ひながら  
悪愛と文学との旅を

## 鉛 筆

短い鉛筆と  
十仙店のタブレットだけです。  
各ん坊ではないのです  
ほんとうに貧乏なんです  
けれども私は、よい詩が書けますように  
神様に祈りました。





鶴嶺湖吟社

森本 系女

岩を負ふて蘆の湖の初風づる  
初日影づく薨の波ひくく

毛利 白龍

初便り三度受けるや柵の中  
初便り読むも嬉しき母の筆

水戸川 光雄

未枯野行けば故郷にある思ひ  
蔓引けばおつる雪や烟の霧

佐々木 民泉

冬仕度たつきの愚知を云ひ合ひて  
警言笛の山彦しきり霧深し

近藤 梅香

元日やキャンブ揃ふて幸の音  
錦木や朝焼に鷗赤く飛べる

小山 さかえ

初髪のかろき小櫛のすべりがな  
初風呂の身に新しき外気がな

松下 翠香

初明りほのぐとして遠雪嶺  
元日の空眞青なる寮

矢成 緑風

初湯出て安き心の寝につきぬ  
廻しやる独樂に思ひ出ふとありぬ



大家 一素

大陸の野に満ち充ちて初日かな  
御降りに打たれて酔の醒め心地

大家 雪香

兒のとどく高さに掛けぬ初曆  
初冬の食卓に手を觸れて座す

上田 里恵子

雨けぶる枯野に消えし道一つ  
冬ざれの柵にもたれて虚心かな

植川 うたた

初便り忘れてならぬ人あはれ  
初髪をやつたり受けし肩の幅

米岡 日章

片假名の文字はほゑまし初便り  
高原に迎へて拜す初日かな

上田 香雨

弦月や城山寒く鎮まれる  
編物や乙女しすなる冬仕度

伊奈 いたる

事務始装黒くタイピスト  
初髪が目立たぬさまにタイピスト

鮑ヶ丘俳句會

新年吟草

山田 如骨

年賀狀中に混りて廿文字  
彈き初めの隣りは娘二人かな

岩下 蘇村

はのくと鮑山より初明り  
戦争のすむまで我慢鉄柵の春



矢野 紫音

八紘にめぐみ溢るゝ初光り

初鵑苗ひろごろ鮑山

田中 素風

シヤスタ嶺の雪に初日の光もちぬ

收容の身にも普き初日影

藤井 丸應

市民權なき気輕さや屠蘇祝ふ

初日の出我れ今日あるを喜べり

大館 無涯

はるけくも聖壽をろがむお元日

はかりなきめぐみ尊み初御空

今村 桃村

これは又義母が送りし鏡餅

校庭に出揃ふ人や初日影

池永 肥州

住民が威儀を正して四方拜

お元日コツクの施米群鵑

山本 涸川

初春や雪の連峰陽に映えて

元日や鮑ヶ丘に陽は大きく

中谷 松畔

初風呂や御慶を交す湯気の中

木句ひとつ賀狀に添へて送りけり

森山 一空

八荒に御校威周し御代の春

短冊に一句揮毫や筆初め

×

×

×

×



若しも木があつたら

道子

さみしい風が吹いてゐた

一人の少女がじつと佇んでゐた

鉄柵の外はどこまでも眩々とした

空と地であつた

鷗がときどき灰色の影を

しろい砂丘におとしてとんで行つた

もしこゝに一本の木があつたら……

少女は黒い瞳をあげて

さう考へてゐた

そしたらその木の下に一日中立つて

ざわざわといふ葉ずれの音を聞きながら

色々な想ひに耽けらう

小鳥らもきて巢をつくるだらう

やがて

冷たい風が吹いてきて

ハラハラと木の葉の散ることによつて秋

の深みを知り

落葉の上に冷たい霜を置いたら

そつと裸になつた枯木を見上げながら

お前も母の無常をさみしがつてゐるの？

としみづ／＼聞いてやらう

少女の佇んでゐる足元は

だんだん灰色に暮れて行く

鉄柵の外はどこまでも眩々とした

空と地であつた



去

年

市場美志恵

「一人」

それが今の私です

月の夜に雪の降る夜に

冷たい風の吹く夜に

貴女達姉妹は

私を送って来て下さった。

今私はその道を一人で歩いてゐるのです。

あの頃の私はすなはでした。

今もあの頃のやうにすなはな

私だったと

貴女達のことを思つてゐるのです

秋

ひまわりが  
かれるよ





くたびれた  
蝶のほそい息  
静かだ。

幾ばくもない  
餘命を

とび立ち  
秋だよ

ひらくくく  
まわるく  
おちるなよ

雲がある

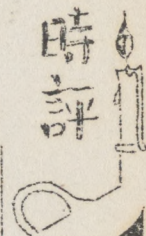
ちよいと待ってく  
私をおいて行くのか

あゝ蝶には  
羽がある





# 思想時評



「鍊成」や「怒濤」が、キヤ  
ンプで流行する日本精神  
に批判的な態度や啓蒙的  
な動きを見せたことを喜  
んでゐる。これはセンタ  
ーが明朗化した證據であ  
るばかりでなく、表面に  
現れなかった知識階級  
の力強い擡頭として、大  
いに激励したいと思つて  
ゐる。高度の精神文化で  
あるべき筈の日本精神が、  
心ない人間の個人的な鬱  
憤の爲に、世俗的に低評  
され、蹂躪されてゐるの

をみせられるのは淋しい  
ことであるに違ひない。  
日本精神はそんなチープ  
なものではないと、教養  
ある人間の誰しもが叫び  
たくなり、又我々の立場  
を認識すればする程、知  
識階級の指導を切望した  
くなる。日本精神が我々  
の肉体に内在してゐる限  
り、それは「米の飯」の如  
き必要なものでありなが  
ら、別に意識しない程度  
に体得しなければ瘡であ  
ると言ふまでに――  
ツリーレーキに未だだけ  
で日本人であることが證  
明されず何かの形式で表

現しなければならぬと言  
ふことが、正しいか否か  
の問題よりも、純なニ杵  
に指導者であるべき人達  
が、思想としての日本精  
神やその体系的説明に、  
果して知識があるか否か  
が問題である。國史と日  
本精神が同時に説かれる  
所以も茲にあり、イデオ  
ロギーとしての精神が行  
動の場合としての精神か  
の区別も認識すべきであ  
る。何と言つても日本精  
神の傳統は長いんだから、  
本質的に不変である日  
本精神も形式的には變化  
して来た。この形式又手



段が如何なるものかを知らう。これも重要であらう。

源平の弓矢の時代から、戦國の槍一本の時代から、鳥羽伏見の戦で近藤勇が「これからの戦争は鉄砲ですな」と長歎息した時代から、「機関銃がなかったのだ」と苦戦を遂懐した時代から、「機関銃は有難いな」と言った『花と兵隊』の時代から、ノモンハン事件後華々しく誕生した機械化部隊や台湾の空を覆った空軍の時代が、傳統の日本精神を乗せてやって来たのである。つまり形式的に科学

的方法を採つたのである。

ノモンハン事件後、日本では「科学する」「科学する心」といふ言葉が流行した。これは従来科学は精神とは対象的物質的な敵であるといふ見解より飛躍して、時間と空間とを短縮した目的への合理的方法として考へ出され、今日の立体戦へ登場したのである。

南太平洋の小島で、皇軍が寡兵よく密林あれば密林を利用し、沼あれば沼を、甲蟲や猛獸のすべてを利用して、神出鬼没に戦つてゐるのからして、

忍術の水遁火遁の術が現在行はれてゐるし、

これが即ち「科学する」と言ふことであらう。頭を使はねばいけないし、むつかしいことですよ、勿論。

二五に日本精神のみ鼓吹して、新体制以後の「科学する心」を忘却すれば、二五は時代より取残されるであらう。日本に帰つたにしても、

組合の図書館に英語で書かれた新渡戸博士の「武士道」がある。日本精神を知りたい二五は一度ぐらゐ読んでもいいと思ふ。





# 愛憎録

伊藤 正

はじめに

「ものがあるから見えるのではない、見えるからものがあるのだ。」と、有三是いひ、さらに言葉をつづけて、「凡ては見る眼だ、見る心だ、見る人の問題だ。」といつてゐる。

私たちはどのやうな眼でものを見、ものを感じ、ものを取容れようと、人各々自由である。したがつて、自分の見たものや感じたものを、そのまゝ他人に強ひる権利や資格は、この世の誰にも與へられはゐない。さういふ意味では、すべての者は、平等の位置に起たされてゐるわけである。だが、次の意味のことだけは、誰にでもはつきりしてゐるはずである。——この眼で何を見、何を感じ、何を己のものとして取容れたいかは、有三の、「見る人の問題だ。」といふ言葉によつて、完全にいひつくされてゐるといふこと。——極言すれば、私はかく見る、といふことは、私はかくの如き人間である、といふことの直接の證だといふことだ。私はここで、人間の愛と憎しみについて語りたいと思ふ。これは私の眼で見、私の心で感じた、愛憎の世の片鱗である。



愛と憎しみは、双生児だといふ。それは闇と光のやうなものだ。光は闇から発せられるやうに、愛は憎しみを母胎とし、最も暗い憎しみをとほして生れ出た愛こそ、最も強い光を放つ愛なのであらうか。

人間としてひとつのデッサンに過ぎない私に、全き言葉の吐けるはずはない。私には何にもわからないのだ。私は何か見たい、何か知りたい、何かりたい、——かうした願望が、私に半可通な言葉をかへりみず語らせるのだ。

## 第一章

「汝の隣人を愛せよ、敵を愛せよ！」と、山上に訓を垂れた聖者のあることを思ひ見ても、古来、人が人を愛することのいかにむづかしく、永い歴史を人類がのたうつて来た憎しみの泥濘の底知れぬ暗さと寂しさがまざまざと想像される。敵は愚か、隣人をさへ愛し得ないのが、人間の悲しい姿なのだ。しかしそのみが人類のまことの姿ではない。暗い憎しみの底に明滅するほのかなる愛の灯によつて、人類はここまで護りといはされて来たのだ。

今次大戦の責任者が誰であるかを詮索するのは、私たちのなすべき務めでもない。私たちが関知したことでもない。それは歴史が公平に示すであらう。ただ私たちがはつきり知つてゐるのは、私たちがその責任者ではないといふことだけだ。しかもその私たちは、かうしてつめたい鉄柵の中に追ひつめられてゐる。



國防上の見地から、西部沿岸のすべての日系人は、キャンプに收容されたことになってゐる。その上、念入りなことには、政府のその政策に、吾々が協力したことになってゐる。何等の反抗をも試みる者もなく、追はれるがままに追はれて来たのは事実が示すところであるが、日系人の協賛の下に遂行せられた總立退きであつたとは信ぜられない。ひらめく銃劍の不安と恐怖を背後に感じながら、蹣跚として追ひたてられ行く恐るべき「敵國人」の全身に、いかに多くの憎悪と冷笑と、痛罵が、無慈悲に投げかけられたことだらう。國防上の見地からのみの日系人總立退きでなかつたといふ事実を、はたして幾人の人々が辯護し得るか？——かう考へて来る時、私たちは、私たちが後にして来た住みなれた土地に渦巻く憎悪を、ひしひしと感ぜずにはゐられない。それはいかにも身近に感じられ、息づまるばかりだ。

「たうとう君は行くのか！」

立退きの朝早く、若い妻と子を連れ、町はずいの家へ別れに来てくれたアメリカ人の友は、私の手をにぎり、私の顔を見つめていった。

「ああ、お別れだ。戦争だから仕方がないよ。」

私は彼のふとい手をにぎりかへした。

「気の毒だね。僕は何とていいかわからないよ。君たちが行つてしまふのを



見るのはたまらない！」

「ありがたう！その気もちだけで沢山だ。僕は自分が日本人だつてことを——  
敵國人だつてことを、知つてゐる。」

「だが、君は市民なんだからね、しかもアメリカの兵隊に出てゐた市民なんだからね。」

アメリカの市民であり、しかも戦前に豫備に編入されたばかりの私がキャンプに收容されなければならぬといふ不合理を、まるで自分の責任でもあるかのやうに、彼の表情には何か恥ぢらうものが感じられた。

「僕がアメリカの兵隊だつてことも事実だが、他の全部の日本人とおなじやうに、僕が日本人だつてことも事実だからね。僕が日本人として取扱はれるのはあたりまいだよ。」

そこで私は言葉を切つた。私は私たちの立退きに同情してくれるアメリカ人の友にたいして、もつとその先を語りたかつた。これから新しく経験しようとしてゐるキャンプ生活への不安と恐怖に、私たちがおののいてゐると思つて、彼は同情を寄せ、心をいためてゐるのだ。彼の想像は見事にあたつてゐる。けれども、少くも私のみの場合では、私は彼の同情に値しない者だ。市民としてみとめられないことも、軍人としてのすべてが、路傍の草をふみにじるやうに蹂躪されたことも、したがつてキャンプへ叩きこまれることも、私にとつてはいささかも苦痛



ではなかつた。それどころか、ひとりの日本人として、他のすべての日本人とおなじ位置に立たされ、おなじ運命が課せられ、敵國人としての苦難を共にするこの出来るといふ事實は、私にとつて、何といふ狂喜であり感激であらう。

このことを私は彼に告げたいと思つた。そして日本の勝利を祈つてゐる自分こそ、眞先に收容さるべきであり、同情される資格のないものだといふことを語ることが出来た。だが、眞実にあふれてゐる彼の表情をまへにしては、そのやうな言葉は肚の底にのみこむべきだといふことを、考へないわけにはいかなかつた。

「それにしても気の毒だ。僕は君が再召集されていくものと信じてゐたのに……」  
と、彼はいつた。

「僕もさう思つてゐた。じつさいはね。だから君も知つてのと同じ、準備までして待つてゐたんだ。」

「五ヶ月間もね。」

「さうだ。五ヶ月間も……。だが、僕が呼び出されるのは兵營ではなくつて、敵國人の行くキャンパなんだ。」

「キャンパにはいつてから呼びかへすつもりなんだらうか？」

「ひよつとするとね。だが、僕が帰米だつてことを、ちやんと知つてゐるんだよ、軍部では……。子供の頃から日本で育つて来たつてことをね。」

「……………」



彼は、私の言葉に、ちよつとためらつた様子を見せたが、直ぐとつづけた。

「僕は日本人をよく知つてゐる。日本人が決して危険人物でないつてことも――」。

「――」

私は黙つて彼を見つめてゐた。

日本人を父母にもつが故に、不当にもひかれて行く自分とおなじ市民の上に、彼の眼は深いあはれみをこめて、まともに注がれてゐた。

「だけどね。」

と、彼はいつた。それから思ひ切つたやうな調子でその先をつづけた。

「だけど、全部のものが、――すべてのアメリカ人が、日本人を知つてゐるつてこととはいへないからね。戦争は、人間から、冷静な思慮を根こそぎうばひ去ることもあるんだ。常識ではちよつと考へられぬ状態だね。だから――こんなことはいひにくいことだが――此處にづつとしてゐて戦時中無事でゐられるかどうか、そんなことも考へて見なければならぬと思ふよ。何處かひとところへ、――キヤンプへでも集めてもらつた方が、かへつて日本人の安全だといふ氣もするんだ。」

彼はいひにくさうに、こんなことを話した。彼の言葉には眞実があふれてゐた。私は泪ぐすみて来た。

彼はつつみかくしなく、ありのままを語つてゐるのだ。彼は大多數のアメリカ人が、日本人にたいしてどのやうな感情をいだいてゐるか、ちやんと見抜いてゐる。



るのだ。そしてそれを恐れてゐるのだ。吾々の想像以上に、全日系人をとりまく執拗な憎悪の渦巻が、時代の濁流の中に不気味に感じられた。

「君の氣もちはいくわかる。どうもありがたう。だが僕らのことはけつして心配してくれなくつていいんだ。さつきもいつたやうに、自分が敵國人だつてことを、僕はけつして忘れないつもりだからね。そして何處へつれられ行つても、きつと元氣をだして生きていくよ。」

かういふ私はわけもない感傷に浸されていった。

「きつと元氣で暮してくれ。それを祈つてるよ。そして平和になつて君たちが再び歸つて来る日を待つてゐる。」

「二度と逢へるかどうか……。何だかこれつ切りのやうな氣がする。」

「そんなことがあるもんか。きつと逢へるよ。逢へないことがあるもんか。君さへ歸つてくれない氣なら。」

「さうだね。僕さへ歸つて来る氣なら……。だが日本とアメリカがこんなことにならうなんて、誰も豫期しなかつたことなんだ。この先き君も僕も豫期しなかつたことが、——つまり偶然が、どんないたづらをしないとも限らないからね。僕らの未来を知つてゐるものはこの偶然だけだと思ふよ。」

「さういつて終へばそれまでだが……。それぢやあまり頼りないぢやないか。さみし過ぎるぢやないか。もういちど逢はう。ね、必ず歸つて来るつて約束してく



れないか。それでないと僕は気がすまないんだ。君たちが出て行く姿を見るのはたまらないんだ。」

「きつと帰つて来るよ。どんなことがあつても——」。

彼のまごころに打たれて、私はあてのない約束をしたのだつた。

この時まで、端でだまつて私たちを見まもつてゐた彼の若い妻は、最後の別れの言葉をのべるために、口もとに寂しさうな微笑をうかべながら、二三歩私に近づいて来た。

「どうか私たちを恨まないで下さいね。私何といつていいか……」。

「とんでもない、ミセス！」

と、私は彼女をさへぎつた。

「あなたたちを恨むなんて、そんなバカなことがあるもんですか。そんなことを本気で仰言られるとこまります。かうして親切に別れに来ていただいただけで、

僕はうれしいんです。」

「でも、ながいこと仲良くしていただいたのに……」。

「ほんたうをいふと僕もキャンブへなんか行きたくないんです。此處にかうしてゐたいんです。でも日本人けひとりだつてカリフォルニアにはゐられないんですからね。いまでもロバート君に話したやうに、僕は自分が敵國人だつてことをはつきり知つてゐます。」



私はせうしい同情を示してくれる彼女を勇気づけたいと思つて、強ひて微笑をうかべて見せた。

「あなたが敵國人だなんて！ 立派なシテズンぢやありませんか。」

彼女はまた彼女で、私の氣もちをひき立てるつもりで、目を見つけて大仰にいつのだった。

さうだ、彼女の言葉のどこにあやまりがあらう。自分はこの國の憲法によつて定められた立派なシテズンなのだ。だが、今となつてはそんなものが何になる！ 今朝のうちに、——おそらく後一時間か二時間もしたら、自分たちはもう此處にはゐないのだ。襟に迷ひ子札のやうなものをぶらさげ、バスに詰めこまれて、ツラレのキャンプへ送られるのだ。市民だといふことと、收容されるといふこととの間に、何のかかはりがあるものか。

それに先刻も、彼女の夫はいつたではないか。——此處にゐるのは危険だと。直接、危険だとはいはなかつたが、——そんな言葉をむぎだしに使つたわけではないが、何處かへ收容された方が日本人のために安全だと思ふと、いつたではないか。

それは彼の好意だ。好意でいつてくれたのはよくわかつてゐる。追ひたてられ行く吾々にたいして、よほどの好意が、——好意以上の深い愛情がなければ、めつたにいいない言葉だ。あの言葉の中には、手も足ももぎとられた蟹のやうな



痛ましい日本人の姿がかくされてゐるのだ。そして日系人總立退きは、軍事的見地からのみ断行されるものでもなければ、日本人を政府の手によつて保護するといふ目的からのみ爲されるものでもない。それは實に、全アメリカ人の胸には燃え狂つてゐるパールハーバー爆撃への憎悪と復讐とが、政治的に悪用さへもされて、今、全日系人の上に冷酷にのしかからうとしてゐるのだ。彼の言葉は如実にそれを語つてゐる。

さう思つた時、私はアメリカ人の誰からか、同情されたくないと思つた。同情されるのは恥辱だとさへ思つた。ドン底までつき落すがいい。日本人はきつとそこから起き上つて見せる！と思つた。

しかしかれら二人の眞實にあふれた言葉や表情にたいしては、私は感謝と感激をささげ、よき隣人としての別れを惜む沁々とした純情に浸されてゐた。

「あなたたちの厚意にたいしてお礼をいひます。そして最後の瞬間まで、かけられない友情を示して下さつたことを僕はけつして忘れないでせう。このことはお別れして終ふまで、かくしておくつもりでしたが、あなたたちの友情にたいして、なにかも打明けて語るのがあたりまいだといふ氣がするので、打明けます。キヤンプへ送られることを僕がよほど悲しんでると、あなたたちは思つて、僕に同情して下さるんでせう。でも白狀すると、僕はちつともそれを悲しんではゐないんです。悲しんでゐないばかりか、他のすべての日本人と共に、日本人として取



扱はれることが嬉しいんです。かういっただけでは僕の気もちは理解していただけないでせう。はつきりするやうにお話しますが、再召集するからといふ通知をサンフランシスコのプレシデオから僕が受けとつたのは今年の正月でした。それはあなたたちも御存知のとほりです。ところであれから何ヶ月たったと思ひますか。今日は四月の二十九日です。あれつきりプレシデオから音も沙汰もないのは、僕が日本人だつてことを向ふではちやんと見抜いてゐるからです。それを見抜かれた僕が、日本人として他の日本人同様收容されるからつて、何の不思議があるでせう。僕はあなたたちが幸福になることを祈つてゐます。アメリカ人が不幸になることを願ふ気もちは僕にはありません。それは事実です。事実としてせめてあなたたちだけにでも信じていただけたらと思ひます。でも僕が日本の勝利を祈つてゐることも事実です。僕は人間としてアメリカ人が不幸に陥ることを願ふ気もちにはなれません。それかといつて日本が戦争に勝つことを祈らずにはゐられないんです。このふたつの気もちはたがひに矛盾しあつてゐるでせうか。これでいひたいだけの事はいつて終つたと思ひます。ですからキヤンプに入られる僕をけつして可愛想だとは思はないで下さい。自分が敵國人だつてことを忘れないつもりですと、先刻から繰返しいつてゐるのは、かういふ気もちからです。」

私はかういふ意味のことを二人に話した。最初はためらひ勝ちにとぎれとぎれに話してゐたが、話していくうちに勇氣を得て、いひたいだけのことを残らずい



つてしまった。

敵國人としての自覚をもつ者の口からは、こんな言葉は断じて語らるべきではなかつたかも知れない。最初に彼と話してゐて感じた時のやうに、なにかも肚の底に呑みこんでおくべきだつたかも知れない。そして何事もなかつたやうな素知らぬ顔をして、黙つて別れていつてこそ、つつしみある敵國人としての思慮と用心深さがあつたといへるかも知れない。

だが、私にはそれが出来なかつた。私はかれらの眞實に打たれた。この感動は私をふたつの感情の中にためらへせた。このまますべてを秘して、黙つて別れて行きたいといふ彼等への心づかひと、素裸になつてかれらの前にたち、ありのままの姿を示して別れて行くべきだといふ氣もちと、このふたつの感情の兩極端に起たされて、私は後者を選んだ。私のこの選擇は、理性によるものではなく、すべてを感情にゆだねた結果だつた。しかもそれは、私といふ人間の性格からいへば、もつとも自分に近い、素直で自然な感情の發露だつた。少くも私にはさう思へた。そして、自分が精神的にアメリカの敵國人だといふ私の赤裸々な告白は、たとひ理性をはなれた感情の遊戲だとの誹はまぬかれないにもせよ、それはどこまでも純然たる愛情を基調としてなされた告白であり、かれら二人を敵としてでなく人間として應對してゐるのだといふ意識は、私自身には明瞭に諒解されてゐた。



私はかれらの顔を見た。かれらも私をまともに見てゐた。私はかれらの表情の中になにごとの変化も見出すことは出来なかつた。ただ、前にもましたあけれみの色が感じられたと思つた。私はほつとした。私は不意に心の重荷が軽くされたのを感じ、かれらの人間的な愛情にたいして、精神的に何等の負債をも持たぬ氣安さに落ちついてゐた。

「さうだつたのか！」

と彼はいつて、私の顔から視線をそらさないでつづけた。

「君は日本人としてキャンプへ行くことを祈つてるといふのか。僕がアメリカの勝利を祈つてゐるとおなじ氣もちで——」。

「あまり喋り過ぎたかも知れないね。」

私はさういふ不安を感じながらいつた。

「そんなことがあるもんか。君は必要以上のことは何もいつてやしないよ。反対に僕が君の立場だったら、僕は何にもいはないで行つてしまつたかも知れない。」

「思つたことは何でもぶちまけて喋つていいつて法はないからね。」

「それはさうだけど、自分の都合のいいやうに相手に自分を信じさせておくつてことは、惻巧なやり方かも知れないが、讃めたことぢやないからね。それは狡い生き方だよ。その意味で、いま君からなにもかも打明けられたかうつて、僕は決して驚きはしないよ。僕はますます君が好きになつた。」



「ありがたう！ 僕は君たちの幸福を祈つてゐる。」

私は晴ばれとした明るい心で水らを眺めた。

「日本とアメリカが戦争してるからつて、吾々までが互ひに憎み合はなけりやないつて理由はないからね。それは悲しいことだよ。だが、実際には、なかなかさうはいかないんだ。」

「――」

私は彼のこの言葉には答へなかつた。どういつて好いかわからないので、黙つて彼を見つめてゐた。

「ほとんど全部のアメリカ人が日本人を憎んでゐる。何故憎まなけりやならないのか、その理由さへはつきり知らないんだ。それでゐて憎んでるんだ。こんな馬鹿なことがあるもんか。」

「敵國人だからね、憎まれるのがあたりまいだよ。」

これが私のいひ得る全部だつた。そして、戦争は理窟ではいけないといふことを、心の中で考へてゐた。

「日本人を憎む前に、何故戦争を憎まないんだらう。戦争の原因を憎まないんだらう。日本人をキャンブへ收容しなけりやならない理由は、――それは理由ぢやない、原因なんだが、――その原因つてのはアメリカ人の……。」

と、彼はいひさして、急に言葉を切つた。



日本人をキャンプへ收容しなければならぬ原因は、アメリカ人の憎悪にあるのだと、彼はいはうとしたのかも知れないと私は思ったが、その先を追求する気もちにもなれなかつたし、また私のこの臆測は凡そ的はづれなものであつたかも知れない。何故なら、人種的偏見や、日系人への憎悪のみによつて吾々は追はれようとしてゐるのではなく、そこには軍事的に充分の理由と根據が存在するのだといふ事實を、私たちは納得させられてゐたのだから……。

「だが、今さらこんなことをいつたつて仕方がないね。君たちは行つてしまふんだもの……。日本人をキャンプへ押込めたことを、吾々が後悔する日が来ないつて、誰にいへるだらうか？」

彼はさういつてから、「グッド・ラック！」と、別れの手をさしだした。

「グッド・ラック！」

私は感慨をこめて、彼のふとい手を強くにぎりかへした。

庭のアカシヤの葉は、五月に間のない朝の陽をうけて、深緑にかがやいてゐた。私はその根もとに立ちつくして、しだいに遠ざかつて行くかゝらの後姿を見送つてゐた。暗い憎悪の渦巻の中に明あかともれる愛の灯を、——永遠に明滅する愛の灯を、ちつと見つめながら……。

かうして私たちは別れた。





# 子供

田原 重雄

先日ひげをそつて風呂場から出たと思ふと、後から「田原先生、お早うございます。実は今朝一寸、恵美子や幸雄の事でお願ひしたい事がございました。」と、いつも髪をバラバラさせてゐる恵美子と幸雄のお母さんが、声をかけられたのであります。幸雄の家に行つて話を聞くと、昨夕のことで、お母さんがマツアをするといつて汲んでゐたお湯を幸雄がどうしたのか、お父さんの大切にしておいた花に頭からぶつかけたので、お父さんに叱られ、今朝は学校へ行かない、と言ふのださうであります。「なに言つてゐるか、幸雄は何處にゐるか」と思つて探すと、彼は兄さんの乗つて歸つてゐる郵便局の自動車に腰かけて、靴の半分もあるやうな鋏の打つてある靴を、ブラン／＼させて、手にジヤムのついたフレッドを持つてゐました。一寸して、幸雄は私より先に走つて学校へ出ましたが、困りましたのは幸雄の妹の恵美子であります。六才になつたばかりの恵美子が、どうしたものか今朝ふと、以前お父さんの使つてゐた消防夫のハットを被つてでなかつたら学校へ行かないといふのであります。大笑ひしつつもお父さんお母さんは「恵美子の奴悪いせになります。」と言つて大心配でした。お父さんは〇〇〇〇〇が聞かれなかつたと言つて、プンプンしてゐるし、お母さんはお母さんで「これならいつ



でもう一年して学校に行かせた方がいいかも知れません。」と、なげやりな事も言つて大騒ぎでした。どうしても言ふ事をきかんのので、「まあいいでせう。」といふ事になつて、私と手をつないで、ニコ／＼消防夫のハットを被つて、出る事になりました。その出る時に、恵美子の服のすそを一寸ひっぱつて、左手で「ハイ」と肩を押し、私の方へ「頼みます。」と言はれた時には、母親の美しい姿を見たのであります。「恵美子、お前は幸福だ。大きくなつて、立派な女になり、孝行者になるんだぞ。」私の心中など子供には分りません、彼女は一生懸命で、昨晚幸雄がお父さんに殴られた話を続けるのであります。

「ね、恵美ちゃん、お母さん達のおっしゃることをよくきかなかつたら駄目よ。先生はなんくわいも言つたでせう。」止つてハットの下の目を覗いたら、彼女はポカッと口をあけて「ハイ。」と教室の返事そのままであります。その時、私は「はあ、こいつ眞から分つてゐないくせに、いいがげんなこと言ふな。」と思ひました。けれども、どうしてそれ以上言へませう。私を見上げる恵美子の顔は神様であります。優しい／＼目、ふくらんだ頬、眞赤な唇、可愛い鼻、どこまでも明るい／＼顔であり、私の右手をしっかりと握つて、私が止れば彼女も止り、「先生、私は先生がゐるなかつたら大きくなれません。」と思つてゐるやうに、私から少しもはなれないのであります。「よし、きあ行きませう。」と歩き出したと思つたら「ヨシチヤン」と大きい声を出しました。どうしたのかと思つたら「先生、ヨシチヤンが、お血洗ひにユキヨツタ。」と言ふのであります。「おんさう。」と答へた私の足は、更に軽くなりました。これが子供だ、これが子供なんだ、純な子供なんだ。返事もしないで行つた



中等科の生徒を見かけて、そのまま呼びかける。恵美子をひっぱって行く私の向かふにはもう学校が見えます。

その後「ゴツ／＼」した岩山の角が見え、鷗も飛んでゐます。夏の朝の小風が後から斜に吹いて来ます。昨晚の夕立雲が残つてゐて、その間から今日の太陽が勢よく赤く昇つて来るのが分ります。私達の足はだん／＼早くなります。「恵美子、恵美子、私達の将来は幸福ばかりだ。ほう聞いてごらん、進軍ラッパの音がする。立派な女になるんだ。先生もね、お前達の先生として、偉い人になつて見せるぞ。」「先生、先生」私の姿を見つけて、歳子、節子、みどり、健児がまっしぐらに走つて来ます。私の愛する子供が、四人まっしぐらに私に向かつて走つて来る。だん／＼こつちへ走つて来るのであります。その時でありました。生れたといふ情性のまま、墓場に進むなんてつまらないと感じましたのは、責任もある、何が人生の目的であるか、眞剣に、更に／＼考へなくては、と感じたのであります。健児は大將になりたいと言ひました。勇次も久男も。「大將にしてやる、しつかり勉強せい。」こんなことはいはない。大將でなく、外になにかにしてやるんだ。「なにかにしてやるから勉強せい。」こ水だけしか言へない私には、人生觀の確立といふ問題がのこつてゐるのであります。其の日は特に教授に力がはいりました。で、私の慾目には、日々子供がすすく伸んで行くやうに見えるのであります。





隨筆

## 安心・自由・幸福

富重利夫

○ 私共は昨日生きてゐた。一昨日も生きてゐた。今日も生きてゐる。だから明日も生きてゐるだらうと考へてゐる。併しこれは大變な錯誤である。

人間は「今日一日生きてゐる」といふ權利を持つて今日一日を生きてゐるのではない。昨夜臥床に就く時、そんな權利を與へられてゐたのではない。今朝眼が覺めてみたら偶然生きてゐたに過ぎない。「必ず生きてゐる」といふ保證を持たない者が今日も生きてゐるのである。だから、今日生きてゐるといふ事は寔に一つの異変であり、奇蹟であり、「儲け物」である。

吾々は明日の事は知らない。一時間後の事も知らない。否、一分間後に何事が起るかも知らないのである。諸君は經驗しなかつたであらうか、今朝遭つて話をして別れたばかりの知人が途中で自動車に轢かれて、夕方には柩に收められて歸



つて来た事を。

○  
思へば人生は奇蹟の連続である。毎日の生活が無事に営まれて行く其の奇蹟なのであつて、実は當り前に行かないのが本當なのである。人間は生命の終りが死だと思つてゐるけれど、却つて死こそ常態であつて、生は一個の奇蹟である。人間の肉體はカルシウム、酸素、水素、グルー等で組成された物質であるのに、それが微妙に生きて動くといふのは、これに宇宙の神秘力が働いて生かしてゐるからである。此の神秘力を吾々は神と呼び佛と稱してゐるのであるが、吾々の生命は其の神や佛から與へられたものとして意識せねばならぬ。そこから「恩寵」といふ氣持が湧いてくる。生を恩寵と感ずる心、受身的な生の味ひ方、「生かして貰つてゐる。有難い」といふ感謝の意識——そこに宗教的な信仰が生れて来るのである。

○  
自らの力で生命が維持されてゐると思へばこそ、自分の淺基な知力や小さな計らひで毒渡りをしようと踰くのである。踰いては失敗ばかりするのだ。ただ因縁のままに生きよ。良心の希求のままに生きよ。自己の運命を神の手に任せてしまへ。何の作爲も心配も焦慮も要らない。クリストの言葉に、「風は己がまゝに吹く。何處より来りて何處に往くを知らず。靈に依りて生くる者亦斯くの如し。」と



ある。寔に、神の叡智を肯定し受容れる者は因縁のままに生きる事以外に方法を知らないのである。

○

老子は、生命は無であり、虚であり、空であると云った。抑、生命とは何であらう。生命とは「働き」そのものである。肉体が生命の本体なのではない。肉体が宇宙の大生命に生かされて働く姿が生命なのである。だから、吾々の生命は水面に映る月影の如く、捉へようとして捉へる事が出来ない。強ひて掴めば、無であり、虚であり、空であつたのだ。働く者は神であり、働く者は人間である。「神人合一」とは此の事をいふのである。人間を「神の子」だといふ意味も、そこに在る。

○

個人の生命はそれ自身に於いて何の意味もない。ただ神に帰一し、神を表現し、人類を表現し、國家を表現してゐる時だけ意味があるのだ。宇宙の大生命と渾然として一体となつた時、始めて意義が生れて来るのである。「人類愛」とか、「同胞愛」とか、「自他一体」とかの觀念はそこから生れて来るのである。例へば、個人の生命は時計の齒車の如きものである。齒車其の物では何等の意義を有してゐない。又たとへ時計の「一部」となつても、勝手に動いてゐたのでは完全な機能を發揮する事は出来ない。時計と一体となつて、「齒車の存在」を忘れてしまつた時に初めて齒車の存在の意義が生れて来るのである。國家主義思想の根底も



此處にあるのだ。個人の生存の意義も此處にあるのだ。

人間が抑へ自分の力で生きて行けるのだと思ふのが大間違ひである。実は「自分の力」で生きてゐるのではない。「因縁」の力で生きてゐるのである。因縁に頼らず、自分の力で生きようとするから、小さな「我」が飛び出して来るのだ。「我」で生きる生活には磨擦があり衝突があるのみで、絶対に「調和」は無い。「おれが／＼」と云ふ氣持ほど他を害し自らを害するものはない。生活の安心と自由と幸福を求めるならば、此の小さな「我」を捨てよ。自分といふ者を全然忘れてしまへ。そして、全体の爲に、全体と共に、全体の力で生きる生活をなせ。

神の叡智に従つて生きる者は素直な生き方をする。無理のない道を歩く。流川のまゝに身を委せて行く。因縁に任せて自由自在に人生を「遊ぶ」のである。不幸に遭遇して逃げもしなければ嘘も言はない。「巧智」で占渡りをする必要がないからである。うまく占渡りが出来るか出来ないかは自分の知つた事でなく、因縁に委した事だからである。路頭に迷ふものなら、幾ら心配したとて路頭に迷ひ死ぬものなら幾ら安心したとて死ぬ。心配するだけ餘計な事である。

私は永い間迷つてゐた。とても心配性で取越苦勞ばかりして、そして愚痴をこぼしてゐた。今、心境自由自在で、常に幸福であるのは、神の恩寵の裕かさを知



つたお蔭である

○  
生命は神の働き自身であるから、常に完全であり、常にベストである。「あの時、あゝすればよかった」と人は屢々過去の失敗に就いて悔む。併し、あの時あゝすれば宜かった、かうすれば宜かったと云ふのは、後になつて反省したり、かゝれこれ比較して言ふ話であつて、其の時には、それ以外に道はなかつたのである。其の時の環境や條件と、自分の考慮の全能力とが其の道を選ぶべく餘儀なからしめたのである。其の時には、それが最上の道であつたのである。實に人間の生活にとつては、刻々が最上なのである。生活には後悔といふものはない。

○  
経済学は、慾望充足の希望と不満とが生活を、文化を進歩させる基調となつてゐると説く。併し、幸福な生活といふものは必ずしもさういふ處にはない。有らざる物を求めるよりも、寧ろ與へられた物を悦ぶ生活に在る。與へられた物を欣ぶ處では、人は如何なる不幸の中に在つても充ち足りてゐる。其處で人は不安と焦慮とを吹き拂ふ事が出来る。「満足」を中心として努力し働いて行く處に、裕かな、落ちついた、深い文化が生れるであらう。

○  
片手に「悟り」を握り、片手に「安心」と「自由」と「幸福」を提げて人生の



行路を歩むのは吾々の理想である。併し、「悟り」を何處かに置き忘れはせぬか、「安心」と「自由」と「幸福」とを取り落しはせぬかと心配してはならぬ。さう心配するのは既に「生命」に執着する事であつて、其の生命はやがて生きなくなる。クリストは曰く、「生命を獲んとする者は生命を失ひ、生命を捨つる者は即ち生命を獲ん」と。諸聖者は曰く、「生きようと思つたら死ね。まよよと思ふ心にならなければ神の恩寵は得られぬ。泳がうと思つたら水の底から足を離せ」と。



解脱を佛といふ。解脱とは執なきをいふ。執なきを自在といふ。執を縛といふ。執は自己を一定の處に縛りつけて其の自由を奪つてしまふからである。執愛も縛である。一定の場所に相手を縛りつけて自在を失はしめてしまふ愛だからである。愛を釈迦は煩惱のうちに教へた。愛をクリストは神性のうちに教へた。愛は煩惱より出でて神性にまで昇るものである。愛は神性より出でて煩惱にまで墜落するものである。愛が愛である使命を果すには、神の叡智に導かれねばならぬ。斯く一つのものにも執したら、苦しみは其處から始まる。「悟り」も「安心」も、さうである。一旦これを得て然る後再び無關心となるのだ。「安心すらも要らぬ」「不幸であつてもいい」「いづれにしても、おれの知つた事ではないわい」と云ふ度胸にめぐりあひたいものである。

(完)



☆☆☆  
社会時評  
☆☆☆

横光利一の「歴史」を読んだ。日露戦争当時満洲國ハルピン在住邦人の引揚げを書いた。どちらかといへば史実に近い物語だが、現在の我々の環境と比較して見て、大変面白いと思つた。引揚人は三つに分かれ、一はウラジオホから、一は遼東から、残りは歐洲經由で歸國してゐる。戦争中は何時でも何處でも同じことで、連戦連敗した帝政ロシアも、よく号外を出し

ては勝つた勝つたと國內宣傳をしたらしい。今日も日本軍を三万殺した。四万人の損害を與へたとか聞かされて、引揚人も随分心細く感じたとのことだ。彼等はドイツに入り、ドイツ船で印度洋を廻つて歸國したが、船中台灣まで来るまでに二百組の新しい夫婦が出来たとのことだ。この夫婦を「引揚夫婦」と稱したさうだが、ツリーレイキでの婚姻を聞く度に、この「引揚夫婦」といふ名稱が頭に湧いて来る。繰返へされる歴史がなか

微妙だとも思つてゐる。センターで引揚結婚が多くなつた。何時日本に歸られるかといふ外部條件よりも、牛は牛づ水との内部條件が力強い理由からの結婚であればいいと思つてゐる。日本に歸つてから結婚すると言ふのも、理想なのか、強がりなのか判然しないが、米國の生活の味を知つてゐる者同志の結婚が幸福の意味からして、最善ではなからうか。お互ひに網の中にあるし、相手を捕獲出来るかどうか、ぐるぐるキャンブを走つて



き出す。ほゞき出されるものは理論ではない。感情だけだ。従つて結婚は平凡な毒の慣例しきたりで考へるべきであり、目的が家庭を持つといふだけなら、それでいいのである。

世界の至る處で、人類  
 の發生してから現在まで  
 毎日行はれるこの種の問  
 題を独り深く考へる人間  
 は不幸であるに相違ない。  
 何故なら、引揚夫婦には  
 彼等の未知な未来の生活  
 をするのに逞しい能力が  
 内在してゐるから。





あ  
し  
た

加  
川  
文  
一

夏の土深く曇りてふところに

蟬を啼かせてわらべ往きたり（憲吉）

地にしみこみし悲しみよ

踏みつけられし涙よ

そはつひに滅びず

灰のなかにのこれる

燠のかけらのごと

そは消えのこりて





人と人とのなかより生るる  
港のあしたに  
燃えうつるべし

ああわれはあしたを信ず  
ほろびゆくものの  
まこともて

われはあしたを信じ  
人と埃にもまれつつ

ただに生くる日の  
つとめをなす

けふのわれは  
つひにけふのわれにてあれど





# 高原の日

加川文一

はや冬とはなれり

草も地も

今は霜に荒れ

吾はその荒れたる風景を  
わが信念の日の祈りとす

ああ吾は凝視めん





冬と霜にむしられ

灰色に荒れ

灰色にこごりたる

風景を凝視めん

刺すごとき

その静けさを凝視めん

今はきびしき日なり

瞳つめたく燃ゆる日なり

緑なき柵のなかにて

吾はわれをつらぬく

高原の冬を

信じて疑はざる日の

わが力とす





高原短歌會本部詠草抄

枯れ伏ししあぐさふ藺草生の上雪降りてみだれしさまに野の面昏れそむ

矢尾 嘉夫

雪國の郷土に落ち着き再びは都会に出でず生きぬかむとす（御風著「凡人淨土」）

加川 文一

日系兵の死傷発表相つぎてその高率に憤り湧く

綾織 謙介

捕はれたるわがつけものらいかにむむ送らむ草履編みにつつ憶い

山内 曾六

（土人酋長の樽みしといふ洞穴附近に行きしことあり）

洞穴のべをたもとほり火打石一つ拾ひぬ何かつくらな

村上 正男



ものと思へて、何時までも止まらなかつたんだ」酒で大分赤くなつた顔に、その時の悲しさを思ひ浮かべるやうにして兄は話した。

「戦友は喜んで拍手喝采だつた。又そのあとが面白いんだ」兄はさう言つてビヤを飲みながら、また話しつづけた。

兄は重警舎に叩き込まれたが、精神状態を疑はれて直ぐ病院に送り込まれた。

兄はうまくいつたら除隊できるかも知れないと心の中でひそかに喜んだ。病院でも色々狂態を演じた。夜中に大声で奇声を發して看護婦を氣味悪がらせたり、食事の時スープの中に手を突っ込んで顔を洗ふ眞似などをした。そんな常規を逸した意識しての狂態を病院で一ヶ月以上も続けた。が、ながいこと氣狂ひの眞似をしてゐると、時々自分は本當に氣狂ひだらうか、といふ錯覺に陥ることがあつた。そして、ことによつたら本當に氣狂ひ病院に送られて、本物の氣狂ひと住むやうになるかも知れない。そんな不安が兄の胸中を去来しだした。その上娑婆の風にも當りたく、ヘレンにも久しぶりで会ひたいと思つた。兄は、もう氣狂ひの眞似をするのが苦しくなつてきた。そして目あてのつかない除隊の計画も放棄して途中で止めてしまつたのだ。一月半の病院生活を送つて、兄は兵營に戻された。歸隊したその日、二年半かゝつて獲ち得た貴重なる一本の腕章を剥奪されてしまつた。

話し終つた兄は煙草を吸ひながら「俺には結局、新兵さんが似合ふらしいよ」



と言った。

「君は俺みたいな兄を持つて情ないと思ふか」

弱々しい眼で私の顔を覗くやうにして言ふのだった。

「いや、俺には君の氣持がよく解る」

兄が手を上げてまた酒を注文しようとするのを無理に止めて、私は外へ出た。夕飯近い故か外には日本人らしい人影も見えなかった。キャンプに帰るトラックでも、と思ったがそれらしいものも見當りなかった。仕方なく私は歩いて戻ることにした。最近切り開かれたキャンプへ通ずる新道は、まだしっかりと石が土に埋つてないので、歩を運ぶ度にゴロゴロとして歩きにくかった。右手には公道に沿った白楊の並木道が林のやうに見えた。左手には大根の葉が青々と繁つて一面に土を蔽つてゐた。その畦には名も知らない野花が、夕方の野辺の風に吹かれて揺れてゐた。私は此の新道を歩いたびに、遠い故郷の往還を思ひ浮かべて、深い感慨にふけるのが常だった。肩と肩がすれ違ふやうにして歩いてゐた兄は、私の肩に手を置きながら、

「ヘレンは相変わらず元気か」

と、酒臭いむつとする息を漂はせて聞いた。

「俺は来ないつもりだったんだ。しかし兵營に帰ると淋しくてたまらないんだ。

そして、休みが近づいてくるといらくしだして、落ちついてゐられなくなつて



来てしまつたんだ」

さう辯解するやうにつけ加へた兄は、私から離れて畦に咲いてゐる野花を摘みだした。

私は黙つて道につゝ立つてゐた。名もない野花を摘んでゐる兄を見てゐると、私は熱いものが胸にこみ上げてきた。とうの昔に、兄から去つてしまつた悪人の心も知らずに、遠い旅をしてわざ／＼サに会ひにきた兄が不憫でならなかつたのだ。そして悪人に贈るのであらう、花を摘んでゐる兄が――。それには私にも罪があつたのだ。ヘレンのことに就いては一言も知らしてやらなかつた私は、それが自分の罪であるやうな自責の念に打たれた。何も知らない兄が悲しかった。が、かうした感情の反面には、憎々しいまでに叩きのめされた兄を願ふ気持もあつた。ヘレンに会つたらいつ。そして変心したヘレンを見たらいつ。若杉とヘレンとの仲を見せつけられて怒りに燃えた兄が、自分の己惚れと、自堕落な過去的一切を花と共に思ひ切り床に叩きつけ、失神したやうに帰つてきたとき、私は時代に流された不幸な兄を心から迎へてやらう。そんなことを思つてゐる私の耳もとで「さあ行かう」花を摘み終つた兄が囁いた。





# 木の節

山城正雄

うるさいことでも言つたら、住居移轉は現在凍結にされてゐるからと、又例の手を用ひて簡単に断つてやらうと考へながら信吉は、誰とも同じ軽い態度で接するらしい三十五前後の、少し肥えてゐる人間ずれのした女の前に立つてゐた。家屋部の受付の前である。タイプライターのガチ／＼と連發する音が、時間の歩みを意識してゐるかのやうに奥の部屋から聞こえて来る。英語の發音を單純化したやうな二三の女事務員の話し声もする。何かを遊んでゐるのが、キープのガチヤ／＼と鳴る鈍い音もして来る。室内の暖い温度を閉めきつ



て、どんよりと曇つた外の陰翳を硝子窓は映してゐた。

「やはり駄目でせうか」

信吉の表情を見てそれと知つたのか、女はおとなしく消極的に言つた。彼女は昨日も部屋を貰ひに来てゐた。多忙だったので、一度は断つて歸したが、今日もまた顔を出したのだつた。

「さあ、駄目でせうね」

又か！と、この種の面倒臭さに慣れた心理の動きを噛んで、信吉は靜かに、むしろ事務的に答へた。女は別に失望の色を見せなかつた。眉間に集中してゐる微笑を崩さず、信吉を掴へて、幾分か明朗に喋り出してゐた。彼女の移轉したいと言ふ理由をである。それには信吉も理論以上のものに対する時のやうに苦笑して聞いてゐた。

女は現在女同志三人で一つの部屋に住んでゐるらしいが、何かのことで喧嘩でもしたのか、相手の一人の悪口を言つてゐるのだつた。だらしない、汚物の後始末が悪い、毎晩十一時過ぎでなければ歸つて来ない、色男を作つてゐるんですよ、と言つた。中年女が男を作つてはいけないのだらうか。いけないのだといふことを独身の同じ中年女の口から聞くのは妙な氣がした。本能的にこんな女の存在を求める好奇心はあつても、晝間人の前で相手にするのを信吉は好まなかつた。水でもぶっかけた上に、又何處かで自分のぶっかけた水の自慢話でもするやうな



女に見えて仕方がなかつた。男なら喧嘩をしたと言ふ。性が合はないなら合はないとはつきり言ふ。だから他に多くある独身者部屋に移してしまへば、多少の不平不満はあつたにせよ、問題はそれで済むけれども、女は昨夜喧嘩しておいても、なか／＼喧嘩したとは言はない。細やかに相手の悪口を家屋部に持つて来ては一々上手に並べるので、喧嘩したのだと判つて来る。信吉には聞いてあげるだけの親切さはあつても、女だけの處はセクターにあまりないので、それではそれと簡単に移さず訳には行かず閉口してゐた。家屋部に持つて来て仕方のない鬱憤を喋られると、女も三十を過ぎると、どの動物よりも小ざがしい感情を持ち出し、利己的な方向へ逞しい生命の根を延ばして行く醜惡な一面を臆面もなく見せるのだと、女から發散する香水の刺戟を意識しながら信吉は思った。女は他に一々具体的な例を挙げて話してゐたが、自分の長舌に疲勞を感じたのか、気分の上でも満足したのか、戸をガチャンと言はして這入つて来たピーコートの四十位の靑ら顔の男をちうりと振り返ると、「済まなかつたね」と頭を一つ下げ、オーバの襟を掴んだまゝ出て行つた。信吉はやれ／＼と思つた。先刻まで腰掛けで待つてゐた青年に、彼は微笑した表情を送つた。青年も女のくだらない話を聞いてゐたと見えて、同じやうな微笑を含んだ眼差しをしてゐたが、這入つて来た男がのこ／＼と受付の前に歩いて行くのを見ると、一旦上げた腰を再び靜かに坐り直した。



「済まんが、何處か空いとるルームはないかね」

粗末な着物を着てゐる男の言葉も粗末だった。

「どうしたんですか」

「ブラツク九一のブラツク九の部屋Bが空いとったので、一週間前、其處にムーブしたんだが、隣りで博奕をやつとるので、夜よう眠れんよつて」

「前にゐた處に戻つたらどうですか」

「もう誰かゞ這入つとるよ」

「追ひ出したらいいですよ。どうせ無断で這入つたんだから」

信吉は皮肉つて見たが、これはよくないと意識し出したので、微笑で崩してゐた。何時か半年前の、ブラツク・マネジャと三角になつて諍ひを惹起したことが、

いまくしく頭に浮かんで来ることもある。あの時、窓を叩き破るぞと、すごい文句をぶつ／＼並べながら、ガチヤンと戸を大きく振つて歸つた日本人の顔に、無智で傲慢な心の貧しきをさへ見た。叩き破るなら破れ。相手はどうせWRAで資本は尽きいのだからと、誰に言つて聞かすのか、彼の心の中にも痰呵を切る仲間並の意地も湧いて来た。この男も移轉する度に壁を剥いで行き問題になると家屋部へ談判に来、拒絶でもすると、又例の十八番を持つて来て「イヌ」だと吠え出す人間に思はれて仕方がなかつた。多くの場合彼の直観は間違つてゐた。

「先方を追ひ出すなんて無理ですよ」



男は言った。

「併し、今のところ何處もあいてはゐませんからぬ」

「わしも子供がゐなかつたら、ムーブしなくてもええが、子供までが博奕を覚えてしまふからぬ」

奥でカチ／＼と音がした。仕事が少し暇になると、カードをやり出す人々の、慾望に動く眼差しや脂汗のべつとりとした、智的なものの弛緩した表情や場面を信吉は連想してゐた。そして、子供の教育上移転したいと言つたこの男を改めて見直す氣になつたが、キャンプ生活を三年間も人生しながら、同じ四か五ビームの部屋に腰を下して、他人は皆のんびりとして庭いぢりをしてゐるのに、何の趣味や利得があつて、今になつても次から次へとルームを変へる必要があるのかと、この男の教育と言つたいかめしい言葉の意味に疑問を置いて見た。

「では、若しルームが空いたら、知らしてあげませう。御名前とアドレスを下さ  
い」

と信吉は耳に挟んでゐる鉛筆を手でさぐつた。

「豊田良太、九一の九Bです」

「では後で知らしてあげます」

書き終つて信吉は言つた。豊田はのつそりと歩いて出て行つた。ピーコートのつづべんに黒髪の薄れた頭が寒さうに縮んで見えた。しまつた戸の外に白いもの



これは單に希望であるかも知れないが、彼は温かいものを感じた。悪い気はしなかった。

黙って道子は別のことを考へてゐた。広吉と二人きり、自分達の新しい家になる部屋に行つた日が、彼女の頭の中に浮いてゐた。その日、一緒にそのブラツクの食堂で夕飯を済ませ、又部屋に戻つて長い間広吉と語つた。若い男の息吹きを感じながら、夢のやうな幾時間がすぎた。

「僕の過去を許してくれろの」

しつこい意志の隠されてゐる声で広吉が言つた。

「許すわ」

米國の映画より習つたのか、彼女は広吉の眼球をぐるぐる見つめながら言つた。「過去」と言はれた言葉の意味が軽いものにしか聞こえなかつた。例の後家かと内心思つてゐた。その時は広吉は何とも言はなかつた。数分後、彼女は淡い疲勞を感じた。「いやです、いやです」と抵抗を見せて言つた自分の言葉の行方を追ふやうな悲哀を感じた。広吉の前髪を指でくく巻き、又元に戻つて来る髪をいぢりながら、クロゼットの棚の上に置かれたハンマーの白い柄をぼんやりと眺めてゐた。彼女が下から広吉の顔に眼を移した時、広吉の鋭い眼が勝ち誇つたやうに覗いてゐた。

「ねー道子さん、本當のことを言ふとね……」



広吉が覆ひかぶせるやうに言った。道子ははつとした。

飛んで行く雁の寒く啼く声が聞こえる。ストーヴの中に炭火が散る。顔を上げると、黙ってシーヤスのカタログの頁をめくつてゐる信吉の手持ちぶさたを見た。

「ねー玉井さん、あたしが何故広吉との婚約を解消したか知つてゐる？」

「どうして？」

「広吉さんには、日本に妻子がゐるの。今年九つになる男の子がゐるんですつて」

「――」

「あたし、こんなこと誰にも言はないつもりだったの。でもね、さつき木の節を出してあんたに見せたでせう。婚約した後、故郷に妻子がゐるなんて初めて言つた男の白々しさが、あの時、ふと頭に浮いて来て、あたしも同じやうなことを言つてゐるんだと気づいたの。でも、あんたのことを言つたことは眞実なの、あたし、本當にさう思つてゐるわ」

弱々しい声だった。信吉はテーブルの上に置かれた木の節を見た。最初から問題にしたつて仕方のない木の節は、轉げさうな影を長く引いてゐた。信吉はダハムの煙草を巻き始めてゐた。



み冬こづく野辺に差す日の光ぬくみ心に沁みて空に對ひぬ

宮村 一雄

年餘經て母ゆ屈きたるみ便りの唯一言を繰返し読む

吉松 博志

千よろづの敵と戦ふ兵おもひこになすなき吾を省みぬ

橋本 京詩

歸る日はいつと知らえず人毎に口癖めけど歎き足らはず

豊福 昌範

明治節・広場遙拜式

同胞は今日の佳き日をことほぐと降りしく雨に身じろぎもせず

中馬 速男

米市民なる自が子に就くけ情ならめど大義思ふべきみ民ならずや(ある友に)

中宮 求香

不幸なる兵偲ひつつ草履縫ふ針の運びの止まりやすし

吉田 きみ子

隔離所の四季のうつろひ身に沁みて時雨降る日を一日籠れり

西居 登美子



夕枯野の空遠く初雁渡る見ゆ早や一年を隔離所に過せる

山本 雅子

吾命を深くきはむれば静かなるものの相に觸れむかと思ふ

渡辺 あい子

訪へば息はずませて語りつぐ病友が心の寂しさに觸る

川崎 とみ子

ほとほとに視野さへざれる濃霧中に現はれし人影忽ち消えぬ

岩本 志満子

正しさの通らぬ憤りもありなれて下心に堪へをり敵國人われは

上村 比呂子

入院

なじまざる臥床にわれの眼涙えて夜もすがら思ふ命の末を

仁熊 登美子

てなうひは思ふのみにて米國に經し歳月を今にして悔ゆ

桐田 しづ

秋晝の土にたづたづと這ふ羽蛾そよ吹く風に乗りて飛ばむとす

泊 良彦



綴方  
教室



之のみの神木

三校中等科

市場 静

私は七才まで母の里で育った。村はまだ維新前の日本の山村の俤をとりめてゐた。鉄道が通じ、自動車走つてもまだく重苦しいまでの静けさを乱すとは思はれなかつた。

村の中程には白壁を周らした十幾つもの倉や老木にかこまれた大地主の屋敷が空家ながらも昔を懐しむ如く、又誇るが如く聳え立ってゐた。夜などはよく家の裏に人魂が飛ぶといふ事であつた。又その屋敷の上にある旧家では雨のしとしと降る眞夜中、白い着物を着た女の人が「からこら」下駄の音を響かせな

がら家を廻ると言はれ、その辺一帯はいやにじめくした陰気な氣持のする所であつた。

その旧家の横にかなり大きな眞竹の藪があつて、その西の端に何百年の年月を経たのだらうか、三かゝへもあるやうな大きなえのみの老木が、梢を終日太陽に輝かし、幹を終日うす暗い藪の中にとじこめてゐた。幹には大きな洞穴があつて、その下あたりから澄切つた冷たい清水が何時もこんくと湧き出してゐた。

私は四五人の友達とよくその藪へ椿の花を取りに行ったものだ。そして泉に行つては木の葉でカップを作つて清水をくんで幾杯もく飲んで、水は甘いやうな味をしてゐた。だが私は決して長くは遊ばなかつた。それは初め祖母の膝元で遊ぶやうな親しさを持つてゐた老木も泉も次々に不思議なくらい重々しく私達におほひかゝつて来るやうに感



じられるからだつた。そんな時、幹に巻かれ  
た注連縄は急に神々しく輝き、洞穴に祀られ  
た石地蔵の優しい微笑が急に弱々しい微笑に  
変ると思はれた。そんな日の夜、此處を通ると、  
きつと何物かが「ばさり」と、水をかけると言  
ふお祖父さんのお話を思ひ出し、陰気な救の  
細道を今にも後から「ニエーッ」と手がのびて私  
の衿首を掴みさうな恐しさを感じながら逃げ  
出したものだつた。

## 收容所の朝

二校六年生

上田 静子

夢を見て居るのかと思ひながら、「静子や、  
静子や」と誰かが私を呼ぶのが耳に入つた。  
あまり大きな声で何度も呼ぶので、蒲團の中  
から顔を半分出して見ると母である。「もう  
朝かなあ」と時計を見ると、何時もの朝の如

く、七時二十分前である。「はい、起きます。  
起きます。」と言ひながら、知らない間に又、  
目がつむつてしまつてゐた。うつら／＼の中  
に再び母の声を聞き、左足を蒲團の中から出  
して見た。「あ、冷い。」でん／＼虫がつのを  
ひつこめる様に引込める。今度は右足を出し  
たがどうも起きられさうでない。ぐ／＼し  
てゐる中に五分過ぎた。これはいけないと元  
氣をふるひ起して、「二、三、で跳起きた。この  
頃は氣候の良い爲か、氣持よく寝られ、ぬむ  
くて／＼仕様がない。

洗面所の前までくると、「お早う御座ゐま  
す。」の挨拶が聞こえて来る。私の様な朝寝坊  
のおつれも今朝は十分多くおられる様だ。と  
思ひつつ戸を開けると五六人の人々がずらり  
と並び、わき目も振らず、一生懸命齒を磨い  
てゐる。朝食の鐘の僅か五分前である。顔を  
洗つてゐると、聞きなれた朝食の鐘がカンカ



ンとさも眠むさうに鳴り出した。今までゆつくりしてゐた人までが、「鳴りましたよ。鳴りましたよ。」と急ぎ出す。自分も食堂にと急いだ。

食堂の入口まで来ると早い人はも早、みかんと片手に持つて出て来られるのに出会う。メスの中に入つて行けば、相変らず、同じ食物がテーブルの上に衆つてゐる。あまりぼんやりと坐つてゐる事も出来ないで、コーヒーを頂き、出て来た。朝は殊に美しい。ギヤソル山を仰ぎながら、「今日も元気で勉強しよう」と胸を張る。急に体中生き／＼と力がわいて来る。だん／＼と御日様が上につれて人々も働き始める。かうして私達の毎日も平和に始まつて行く。

## 幼き者

三校特別科

京谷 あやめ

「トニー」と言ふのが彼の通稱であるが私はまだ彼の日本語の名前は知らない。彼は私の近所に住んでゐて、父母と五六才になる一人の兄がある。彼は四才であるがよく太つて円いおどけた様な顔の持主である。

彼と私が仲よしになつたのは、今から三ヶ月も前の事であつたらう。それまではよく見てゐたが、別に声を掛けた事はなかつた。

或日の午後、私が何するともなく戸外に立つてゐると、彼は二三人の友と棒切れをふりふり通りかゝつた。私は、ふと彼の靴の紐がとけてゐるのに気が付いたので、「トニー、靴の紐がとけてるよ。」と言つてやつたら、彼は足下を見てゐたが、つか／＼と私の側に来て前に足を突き出し、「ムスンデ」と言つた。私は彼があまりにもぶつさう棒で、素直なのに驚いたが、だまつて、うつむいてその穢い泥塗な靴の紐を結んでやつた。彼は私が結び



終ると何も言はずに行きかけた。私はわざと大きな声で「サンキュー」と言ったら、彼は一寸振り返つて無愛想に小さな声で「サンキュー」と言ふが早いか友達と一目散に駆け出した。私は彼等の後姿を見送りながら、初めて小供と交つて、彼等が如何に無邪気で気樂なものか解つた様な気がした。

其の翌日であつた。彼は又友と表を通つてゐたので、私は呼止めてお菓子を與へた。彼は此の時初めて微笑を浮かべて、其の辺にゐた二三の友に見せびらかせて誇らしげに食べかけた。小供等は羨ましきうな顔をして見てゐた。私は即座に悪い事をしたと気づき、家の中へ駆け込んで其の二三の子供達をも呼び、皆に同じ様にお菓子を分けてやった。彼等は皆嬉しげにして、行つた。

其の後、子供達は私を見る度毎に側に寄つて来てはにつこりする。幼い弟や妹のない私

には何だか彼等が無性に可愛く思はれる。

或時などはトニーが先頭に、三人も四人も友達を連れて「キャンディーアル？」と言つてやつて来るが、私はどうしても彼等が憎めなく、何時も彼等のきくまゝにお菓子を分けてやつてゐる。私は時々彼の着てゐるものを見て、可愛想に思ふ事がある。併し、子供は何も知らない。どんな着物を着せられてゐても、そんな事はちつとも気にする事もなく、他の友達と同じ様に一日中飛び廻つて遊んでゐる。そしてよく泣かされては大きな声で泣く。そんな時には私がいくら宥めても、お菓子をあげると言つても、見向きもしない。其處が小供だと私は思ふ。誰にはばかる所もなく泣きたい時には思ふ存分声をはり上げて泣き、嬉しい時には、この上もなくはしやぎ、憤る時には憤る。そして朝から晩まで好きな事をして遊ぶ。こんな呑気な生活は又とあるまい。



私は此の様に小供は小供らしいのが好きである。そして、これが子供の尊い所だと思ふ。今後、彼等が何時までもあの素直な心を忘れずに、春先のすく／＼と伸び行く竹の子の様に成長して行く事を祈ると共に、又私も未長く、彼等の良き「お姉ちゃん」になりたいものである。

## 朝

八校五年生

渾野

智

何かの物音にふと目がさめた。もう窓からは明るい光がさしこんでゐる。隣の人もしきと見えてかたがたと音がしてゐる。僕は何となくほがらかになつて飛び起きた。着物を着て顔を洗ひに行く爲に外へ出ますと、不意に「ちゅうちゅう」と、雀が驚いた様に飛び立つた。向うの屋根の上にも雀がさまたのし

さうにさへづつてゐます。

青くすみ渡つた空には、雁がうるさく鳴き始めた。

あちらでもこちらでも、食堂の鐘がなり出した。やがて僕も食堂へと足を運んだ。朝飯もすましたが、学校へ行くにはまだ早いので、自分の室を掃除して勉強にとりかゝりました。窓を明けて朝の新しい空気を入水、机に向かつて時ははんたうにせいぜいしました。

しばらくすると、前の学校がさわがしくなつて来ましたので窓からのぞいて見ますと、一年生の子供達が元気よく自分達の教室へ急いで入つて行く所でした。

僕も時間が来たので時間表をあはして家を出ました。学校の前では皆が朝日をあびて元氣よく飛び廻つてゐました。朝日に照らされて、僕は自分の長いかげを地面に落しつつかへいそぐのでした。



# 塵埃

一校中尉科

洪口 弥生

西方の空を黒雲が蔽つてしまつて、今にも驟雨が来さうな模様になつた。冷気を含んだ風が埃と一緒に吹いて来て、西方の家々は埃に包まれた。家に入つて素早く窓を開める。

農園の白菜が東南に向つて葉の裏を見せ、最敬礼を始めた。向うのブラックでは今まで呑気に構へて乾してゐた洗濯物を慌て、取込みに走り出る。屋根の上に一粒、二粒の雨が點をうち出した。埃は窓や戸の隙間から否應なしに侵入して来る。机の上の書物に手を觸れると、ざら／＼して指紋を取つた跡の様に残つて、手が白くなる。埃臭い。息苦しい。よるで大掃除をしてゐるやうだ。埃は益々激しくなるが、雨は三粒、四粒と数へられる程しか

降つてくれない。電気の灯が埃の爲に鈍い光を放つ。電球が埃に化粧をして貰つてゐるのだらう。五分経ってから霰が降り出したかと思はれるやうな音を立て、沛然と降つて来た。やあ、助かつたと思つて東向き窓を開けると涼しい風がさあつと入ってくる。野菜に積つてゐたさしもの埃が雨に洗はれて青菜が元のすが／＼しい光りを見せる。甦つたやうになつた。

しきり降つた雨はだん／＼と小降りになつてもう黒雲は何處かに逃げて、西空は茜はなやかに映え出した。





# 隔離所に再び年迫る

泊 良彦

亂れ立ちし前列<sup>さき</sup>なる雁群<sup>かり</sup>を追ひ越せり朝空<sup>そら</sup>の二列<sup>ふたつら</sup>に戦ひを想ふ

同胞<sup>ひとり</sup>の一人と己れ恃めども爲すなくを過ごす祖國<sup>くに</sup>興廢の時に

わが祖國<sup>くに</sup>の死闘<sup>しと</sup>を思へばわがどちや身を安易<sup>やす</sup>らく生きて愧<sup>はぢ</sup>あり

生き死にの戦ひつづく祖國<sup>そこ</sup>思へば空しくを送る年ぞ嘆かゆ

交換船必<sup>かならず</sup>づ出づと知らなくに新年<sup>にんじ</sup>に恃む心明るし

「血」に結び理念に據りて現<sup>あき</sup>つ神統<sup>かみ</sup>べます祖國ぞ興らざらめや

神代より受けつぐ祖國なり拙<sup>せつ</sup>な身の生き死に共に寄託<sup>よ</sup>する畏<sup>かしこ</sup>き

ここにして民のつとめけなきなくに戦況聞けばいはむかたなし



# 底 火

山城正雄

粉雪の降る日の午後です

ストーヴの円い胴をみつめて

ぬんだ情熱のあたたかい底火に

淋しく君を想ひ出す冬の午後です

静かな今の私の心です

自分の宿命を悟ったひとときの

人なつこい孤獨感をいだきながら

青春を見送る淋しい心です



ただ「ハロー」と言つてゐた頃が  
一番嬉しかった頃だと呟いた乙女よ  
四十才になつたら

若い日のすべてを話してくれと

しみりと語つた君の

永久の聴<sup>き</sup>者でなくなつた私なのです

静かなあきらめの湧く日です

自分の個性を生かして行かうと

心に強く決めながら

鉄色に黝んだ君の華奢な像を

円いストーヴの黒い胴に映して

じつと眺めてゐる私の頭の中にも

粉雪の降るしめやかな日です

未来を見つめて落ちついた私の心です



海

辺

雪村 桂二

来ても見れば

わけもなく ただわけもなく

緑の海のなつかしく

打ち返る波にあてももなく

想ひを寄せて

白いなぎさに立つてゐる

何も見えない海に汗と垢にゆれて

ただ故國へとどいてゐるだらう緑の

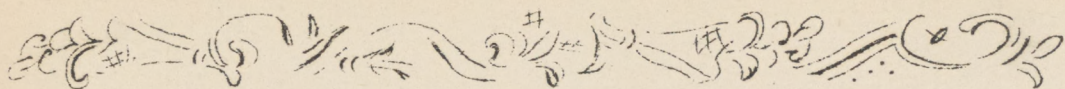
海のなつかしく

潮の音のする

白いなぎさに立つてゐる







# 母のをしへ

白井園子

見渡せば……

ひろくとつゞく荒野原

たゞずめば……

はるくと風に鳴る師走の地平線よ

旅に寄せるうれひを

たのしんだ日もあつたが

あきらめは切ない

音もなく流れ行くものへの感情

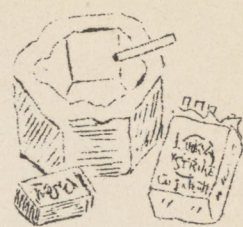
生活は單純こそ尊けれとの

幼き頃の母の教へを

母より受けついで

私は素直にならうとするのです





## パチンコと白想

大山 空夫

七十八

心を空にして歩むといふ意味であらうが散歩を上海語で白想と云ふ。この言葉の中に全く良く上海の自然が反映されてゐる。散歩といふ日本語の中には日本の自然が亦適確に現はれてゐる。心を風景にとめ、歩を散らして楽しむといふところに日本の自然の上海辺りに見られない點が現はれてゐる。英語で散歩を單に歩むと云ふ。この言葉にも亦英米の風景と人の氣質がうかがはれる。心をとどめて楽しむ程の自然もなく、心を空にして歩む程の悠長な心の生活もないさまがよく現はれてゐると思ふ。

ぶら／＼と歩いてゐる人達をツリレキのそこら辺りによく見かけるがどの人を見ても眞に難かしい表情をしてゐる。散歩でも白想でもないらしい。無理からぬ事で、一寸行けば鉄柵のポストにぶつつかう様なこの狭苦しい所では、うっかり歩を散らしては歩めないし白想しようには亦余りにあつたゞしい、ごた／＼した周囲を持つ生活である。晝食の茶のまづさが心に残つてゐたり、短い食事の間



にでも戸締りに気を配らねばならなかつたり、誰それが誰それを何とかしたといふ様な話が絶へず耳の底にあるツリレーキの人々に白想の出来るわけがない。結局、吾々のこの小天地もアメリカの一部であつて、散歩も亦歩み以上のものにはならないわけである。

×

×

×

或日、散歩ならぬ歩みを試みた。そして、或ブラツクに通りがつた時にパチンコを遊んでゐる二三人の子供が眼についた。私は立ちどまつて少時それを見てゐた。キャンプに入つて三年近い間見なかつた物を見たといふ珍らしさに立ちどまつたわけでもなく、亦パチンコ程の物も手に入りにくいといふキャンプの子供達の生活に同情をひかれてその子供達に見入つたわけでもない。私が漱石だつたら例のしつこさを發揮して、情に悼さして、人の世は住みにくいなど考へたかも知れないが私にはそんなしつこさもなければ、散歩の途上で吾間を考へる程の興味を人間の生活に持たない。私がパチンコを見ながら考へた事は全く別の事である。子供等は電柱に書かれた小さな圓に向つてかはる／＼パチンコの石を發射してゐる。よく見てゐるとたいてい的らない。大部分は所謂ニヤミスである。私はその時一つの假定を考へて見た。若し子供等が私からは見えないバラツクの向ふから石を發射しており、亦圓も私には見えないとしたなら、果して私にこれらの石が或る電柱の一定の場所に向つて意識して發射されてゐると断定し得るであらう。



か。この假定は私を純粹の精神科学から自然科学と精神科学の限界領域へ引込んだのである。私がこゝに限界領域と云ふのはかういふ理由からである。現在の自然科学がこの飛ぶ石の群を見たならば先づ石の的つた点の分布を確めて、一番多くの的つた区域に圓を描いて、石はこの圓に向つて發射されてゐると結論する。この科学の描く圓が子供の描いた圓と必ずしも一致するとは限らない。亦一致する事は極く稀である。二つの圓が確實に一致した時に吾々は自然科学が子供等の意志を見出したと斷じ得るのである。二つの圓が幾分かの相違でも示してゐる間は自然科学は全然、子供の意志とは独立したものであつて、石の命中の測定に従事した科学者は自然科学の方法により乍らも精神科学と自然科学の限界領域の中に在るわけである。彼の描く圓が子供の描いた圓に近づく程、彼は精神科学の領域に近づくのであり、子供の遊んでゐるパチンコの目的を次第に發見して行くわけである。

自然科学は自然の諸々の現象に秩序をつけるものである。その秩序を吾々は原理と呼ぶ。然しその原理に一度目的を與へると最早自然科学は自然科学の正道から邪道へ入り込んだものであると多くの科学者は考へてゐる。引力は原理である。然し若し私が引力は何物か自然に與へた目的であると云ふたならば、私は最早科学者の群の異端者であると云けれる。私はかういふ批評をさせる思想の持主である多くの科学者にこのパチンコの問題を考へさせたい。吾々は單にパチンコを



發射してゐる子供が見えないといふだけの理由で、子供の存在、パチンコの運動、そしてパチンコを射つてゐる子供の意志、亦、電柱上に圓を描いた子供の意志の存在を否定し得ない。亦、科学者が命中卓の分布から描いた圓が子供の圓と一致しないからといふ理由で石は子供の圓に向つて子供の意志によつて發射されてはゐないと斷言は出来ない。何故ならば事實は子供等は彼等の描いた圓に向つて石を射つてゐるからである。全ての自然の現象はこのパチンコ遊びと大差はない。見えるものは飛んで行く石ばかりでも、そこに見えない子供があると同様に、自然科学者の眼に入り測定にかゝるあらゆる現象の裏に、彼等の眼にも映らず、測定器にも現はれない意志が在り得るのである。さういふ意志が何と呼ばれ得るかを私がこゝで云ふ必要はあるまい。

こんな事を種々考へ下ら私は子供等を離れて散歩を続けた。家へかへつたら妻が何處へ行つたかと聞く。散歩に行つてパチンコを見て来たと言ふと、是非子供に買つてやれと言ふ。私は何とも答へないでパチンコ遊びを見ながら考へた事を話し出した。妻は聞くと聞かぬともない様な風で坐つてゐる。話し終つて、私の云つた事が解るかと思つて、「よく解る、實に下らぬ事を考へるものだ、そんな人生に無意味な事を考へ下ら歩む事を白想といふ、歩まないで机の前に坐つてそんなことを考へるとそれを空想といふ」とすげなく私の話を一蹴してしまつた。



## 選後感

懸賞小説には、初めから大して期待はかけてゐなかつた。それでも、どんなものが送られて来るか楽しみで待つてゐた。直接社へ持つて来た人も、郵便で送つて来たのもあつたが、期限までに集つた十数篇読んで見て、終りまで読み通すことの出来ない程の駄作もあり、まづぐと思ふ作品、等々、色々のがあつたが、これはと思ふ読み應へのある、所謂水準に達した作品は一篇もなかつた。さて、どれを賞に採つたものかと、同人が集まつて、色々と討議した結果、

候補として、赤兒與伍嶺氏「朝顔」、綾万里龍氏「若人の素肌」、谷ユリ子氏「母の行路」の三篇を挙げた。

最初の「朝顔」は、先づオーに、作者の奇妙なペンネームを見て、厭な気がした。眞面目さを缺いた人だと思つた。ペンネームだから、どんな名

### 懸賞小説當選者

一等 母の行路

谷 ユリ子

二等 若人の素肌

綾万里龍

前をつけても構はないではないか、と云はれ、ばそれまでだが、そんなものではないと思ふ。かうした悪い第一印象を抱いて読んで行つたのであるが、作品は思つたより悪くなかつた。大衆的な嫌ひはあるが、筋もしつかりと纏つてゐるし、表現法などもうまいものだと思つた。しかし、小説はそれだけでは駄目である。要はテーマであり、内容である。二母の娘を主人公にして、歸米二母との恋愛を書いたものであるが、唯、單なる恋愛の進展を書き流したものに過ぎない、といふ感じしか得られなかつた。私の心に觸



れる作品ではなかった。

次の「若人の素肌」は、サン  
タフエから送られて来た。キ  
ヤンプのメスホールでのクツ  
クを中心にして、いろ／＼な  
諍を取扱った作品である。相  
當文学を勉強してゐるらしい、

感傷のない、所謂現実的な作  
品である。正直に云つて、私

とは反対の生き方である。か  
うした種類の作品は嫌ひであ  
る。現実を凝視した、リアリ  
スチックな作品であるかも知  
れないが、現実を凝視する作  
者の心の流れが好きになれな  
い。やはり、ヒューマニスティ  
クな精神が、私に欲しい。純粹  
性が欲しい。それに、途中に

## 佳作

朝 顔

埃だらけの生活

走馬燈

新家庭

鉄柵の彼方

出て来る世との経緯は余分な  
もののやうに思はれる。

「朝顔」と、「若人の素肌」のど  
ちらを二等にすべきかに迷つ  
たが、「朝顔」は、二十頁に近  
い、規定の枚数の倍もあり、  
掲載不可能の理由と、ペンネ  
ームのことで、「若人の素肌」  
を二等に決め、七号に掲載す

ることにした。

最後の「母の行路」は極め  
て素朴な作品である。前者の  
二人に比して、幾分か小説を  
書くのに未熟な人らしく、技  
巧のあまり上手でない、体当  
りで書いた作品である。腹に  
子を持った人妻が、いろ／＼  
と生れ出づる子の事など、複  
雑な感情を包んで母親に逢ひ  
に行く。そこでの、出征して  
ゐる兄から母への手紙を通し  
て、息子を想ふ母、それに対  
する彼女の氣持を描かうとし  
た、非常にいい構想の作品で  
ある。が、まだ／＼修練され  
てゐない作者の力では、不正な  
もののしか出来上りはしなかつ



た。然し前者の作品に比して、

この作者の、素直さ、感覚の新鮮味、これがこの作品の良きであらう。私はこれを一等に推薦した。他の同人も私に同意してくれ、一等当選に決した。

無條件に偉れた作品なら兎も角、かうした種類の作品に等級をつけることは難かしい。私のやうに、現に小説を書いて、小説を書く苦しさをいくらかでも経験してゐる者には尚更のことである。しかし、等級をつけることに依つて、作者をして、いくらかでも、激励、刺激することが出来れば、幸であると思つてゐる。

(河合)



自分達で雑誌を出す。懸賞小説を応募する。自分達がその選者になるのは当然だが、選者であると自己意識する気持は妙なものだ。自信の無さから来るのか、優劣の尺度が曖昧になり、どの作品も佳いと思はば佳く見え、悪いと思ふと駄作に見えて来る。甚だ頼りない選者だが、「絶対的」といふのを抜きにしたら、正直なところそんなもんかも知れない。

こと文学に関して、方々のキヤンプで「誰々選」と大膽

な看板をぶらさげてゐるのを見て、果して彼等にその実力や資格があり、眞珠湾以前には如何なる傑作を發表し、又如何にして選者の立場まで精進したかを考へると、選者なんていゝ加減なもんだとしか思つてゐなかつた。こんなことを言へば、又誤解されるかも知れないが、文学をやり、文学に人生の目的を見出ださんとしてゐる私が、より高價な作品に憧憬し、現実な平凡なものに対して懐疑的であるのは仕方のないことだと思つてゐる。従つて「集つたものの中から」一二等を決めるのだとはつきり解つてゐながら、



頭の何處かで眞に自分の求めてゐる作品や、日本の文壇のそれと比較してゐる不安があり、思ひ切つて等級を決める気にはなれなかつた。どれが一等になつてもいいと思つたし、選者の一人としての責任からも避れたかつた。他の人達に賛意を表したまでである。併し、個々の作品に対しては、私は私なりに感じたこともあり、考へたこともある。批評することが文学上の親切であり、選者の立場にある人の愛情であり、投稿者が眞にさうとつてくれたら、私も安心して少し書いてもいいと思ふ。

先づ「母の行路」だが、我がの立場から言へばこれは良くないのかも知れない。併し乍ら、親子の關係は嚴然として存在してゐるし、子を慮ふ親の苦痛は、ツトリレーキに來てゐるからこそ、デレンマーの深刻性は倍加したであらう。いゝ主題とは思ふが、深く掘り下げるとはキヤンフの特殊性が許さないし、又作品にそれを希望するのも無理であらう。

私が散文学の大家であつたら、私は「若人の素肌」の底に流れてゐる文学精神に觸れて、こんなことを言ふであらう。「考へて見てごらん。君

の生れる以前にも人間の社會はあつたんですよ。釈迦もキリストも生れ來て、失敗して死んで行つたんです。外部に政治的に行動的に延びんとする君の強がりがいけないんです。戦争といふ現實の前に何故沈黙しないのか。君の本質は内省的ですよ。」と。

「朝顔」や「埃だらけの生活」の文章は好きです。唯主題の運びをどうかと思ふ。

(山城)



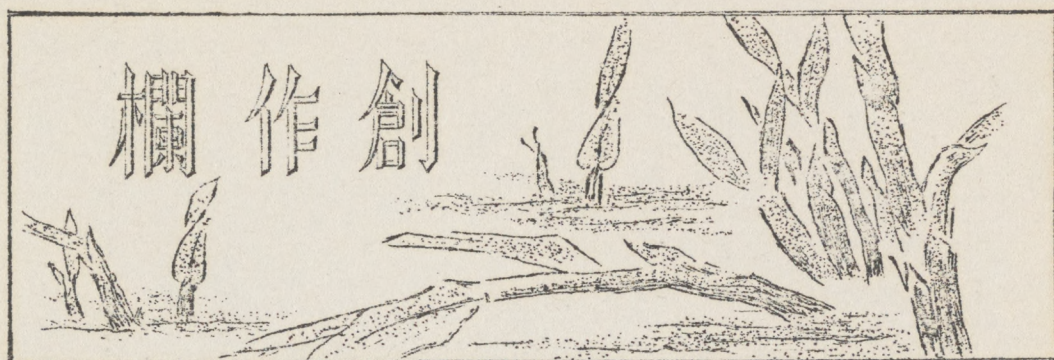


懸賞小説一等當選

# 母の行路

谷　ユリ子

八十六



菊の花がしぼんだ秋の午後だった。

ぼやくして居れば尚淋しい縫物の手を休めて信子は鏡をのぞいてお化粧をする。眉墨や紅をさしてやつと人間らしくなった。

これが母の顔だらうか、人の母となる顔だらうか知ら、それとも未だ娘の顔だらうか、と信子は苦笑したが……此の頃さかんに胎動を感じるのであった。

母の喜びは果して母となるにきまり、それから限りなき幸福は開けるのか知ら……その日から苦患の十字架を背負ひながら生きて行かねばならない母の道。

一針一針と運び、母と子の姿を描き、母となつたら我が子以外のものをも愛し見守り、我が子を此の腕に



抱いたならばどんなに偉せだらうと、ポツと頬をそめていら／＼した感情をギュツとしめ、急にしく／＼泣き出した。母を頼つて生きて来た信子は、一寸した時に母の言葉が絶えず胸をふくらかせて、居ても立つても居られない程になつて来るのである。

臨月に近づいて急に気持の上に變化が来た、夫の一寸した冷たい言葉に泣き出したりする。物事に感じ易く、僅かな事を喜んだり、子供みたいにメソ／＼泣きたまらなく母の愛情がほしくなつて来るのであつた。今日も又さうした感情に囚はれ、やり場のない心の寂しさをもて余しながら、人目につかぬやうにドアにキーをかけると「下町」に下りて行つた。

低い「下町」の屋根々々の上に明るい陽光がふりそゞいでゐた。さつぱりしたキャンプの景色を眺めながら歩いてゐるが、しかし瞳の動きは決して夢なやましい景色などに興味を持つてゐるのではない。今の場合は唯母に逢ひたいばかりであるが、信子の歩みはますます／＼落着いて周圍の生活が目について行くばかりであつた。

鱗のやうに続いた家々の屋根の下には、遠慮なく並んだ大根が水分を失つて飢死してゐるやうに見える。あちらこちらの窓に若い母親が一寸顔を出して家の外で遊び戯れてゐる我が兒を見詰め、モグ／＼と口を動かしてゐる。始終見てゐるキャンプの生活だけど、我にもなくホウーと熱苦しい吐息を洩らしながら同じや



うな長屋をクル／＼通つて、

「お母さん」とポーチに這入ると漬物の香がプウンと胸について来た。

「オーくさい……」

ドアを開けると、母は椅子に坐り、兄の蔭膳の前に目をとじて、銅像のやうにキチンとしてゐる。メツキリ増へた母の白髪が日光に寂しく光つてゐる。母に対する溢れるやうな愛情を抱いて来たが、さて母の姿を見るとそこには別の世界の空氣が流れて、信子の愛情はかたくなつて終ふ。

「まあ、信ちゃん！ 又来たの？ 仕様のない子、そんなに散歩しても体に障りはしない？」母は目をしよ／＼させて娘を見た。

「大丈夫よ、お母さん」信子は大きなお腹をクル／＼なで廻しながら、

「この兒とても乱暴なお母さん、動いてばかりゐるのよ」

甘えるやうな顔をして母の肩をたたくと、

「まあ仕様のない子……それはさうと兄さんから手紙が来たよ。どうもオバシーに行つたらしいよ。信ちゃん、まあこの手紙を読んで見ておくれ」

大事さうに信子の手に渡した軍事郵便。母は何時も兄の手紙を一人で読まない。だが——どうして兄が戦地に征つた事を知つてゐるのか知らず？ 此の頃になつてから急に母は息子の手紙を読むのが恐くなつて来た。何時かはキット第一線に征くに違ひない。戦死!! そんな悲しい手紙が来ると信じてゐた。だから母は手紙



が来る毎に瘦せたり肥えたりして周囲の人を心配させた。さうした可哀さうな母。  
「ぢや、お母さん読みますよ、しつかりしてね。」

信子は一寸母を叱る眞似をして、咽喉をうるほし兄の寫眞を眺めてから読み出した。

お懐かしいお母様!!

お変り御座いませんか。近く一線へ征きます。この手紙を御覽になりまして何とおつしやいませうか?

お母様、既に心の準備は出来てゐます。たしかお母さんは僕を呼びながら、泣いて僕を思ひ出して下さると思ひます。十九年間お母さんの膝下で暮し、可愛がられながら心配をさせた苦の息子は今、もの呼べど声なき寫し絵を眺めながら、物さびしい音楽が流れて来る燈火の下で最後の筆を走らせてみます。今の僕の生命の中には母の愛の言葉、祈禱があつて呪詛は一寸もありません。長い間侍せに暮して来た僕にとつては、とても堪へがたい。再びお母さんに逢へないと思ふとササしいやうだけど堪へ得ぬ程に心が千々に乱れます。今日だけは許して下さい。

お母さん。

此の黒髪は僕だと思つてお傍へ置いて下さい……………やはり出来たらお母さんの故郷の土にして下さい。お母さんに孝たらんとすれば國に忠ならず。然



し僕の場合は仕方がない。今日の僕の気持ちを知って下さるのはお母さんだけだと思ひます。米國に捧げた兵士の母、その母は冷たい鉄柵の中に隔離され、戦地の息子を案じてゐるでせう。

去年送つて貰つた千人針、勿体なくて僕幾度も泣きました。あの一針々々が僕の心をさしました。々々しい事だけどこんなにやさしいお母さんが季節々々に送つて下さる漬物、我儘一ぱいに育つた悪戯者をこんなにまで思つて下さることを思ふと、本當に優しいお母さんの子にもう一度生れて来たい気がします。妹夫婦の兒をどうぞ僕だと思つて可愛がつてやつて下さい。もう妹も人妻か……早いもんだなあと思ひます。母界中で一番うまいと思つた理窟を正々堂々と言ひまくり、随分根強く争ひ長い間口も利かないで意地の悪い沈黙をしてお母さんを困らせた頃が一番なつかしくてなりません。思ひ出の糸に結ばれて解けない心。一体誰に慰めて頂きませうか。無茶苦茶に……人の母の別れにまさる悲しみはあらじ、と書いて見ました。お母さんこんな事を書いちやいけないでせうね。

僕の体の中には赤い血が流れてゐます。勿体ないけど大和民族の血を受け継いでゐる僕。一たん捧げた体です。生還は期してゐません。死ぬ時が来たら日系市民として恥かしくない行動をとり、潔ぎよく戦死する覚悟です。お母さんお体を大切に一日も早く平和の日が訪れて来るやうお祈りして……



もう一度お母さんお父さん信ちゃんと呼びながら筆をおきます。

○月○日

永遠の勇より

お母様

信子は涙にむせびながらやつと読み終へた。母は一滴も涙をこぼさないでじつと兄の寫眞を見詰め、泣きたくて堪らない気持ちを無理に殺してゐる。老いた母を涙にかすめて見てゐた信子は我を忘れて、

「お母さん、お兄さんがとうとう……」と瘦せた母の肩を抱きしめた。

「お母さん心を決めませうね……」

「さう……」

涙にかすれた声は如何に悲しい言葉が含まれてゐることだらうか。母は緊と信子の手を握りしめた。母の目は何かを現はす経清い光に力が溢れて見えた。その清らかな光は母性を現はす……千古不滅の母性愛の姿であつた。さうした母の姿を眺めてゐると遠い昔の夢が信子の頭に浮んで来た。

X

X

母は若い頃一種の情熱家であつた。割合兄妹は幸福に成長した。江戸ッ子気質で、その場がかみ／＼云ふ昔気質の窮屈な祖母に育てられた母は、時々喧ましい言葉を朝から晩まで家の中にまきちらして、意見の相違から父とよく衝突をした。母は泣きながら怒ると、憎々しくなり、もう少し優しくなつたらいいなあと云ふ



と、

「私が優しくなつたら大変だよ」と母は冗談のやうに云つた。

母ももしない一九四三年の二月、杖とも柱とも頼つてゐた一人息子の兄が召集された。

母は戦争を心配してゐる。出征してゐる兄弟、夫、愛兒、が無事であるか否か、無事で歸つて呉れ、ばよいかと祈つてゐるのは人情であらう。此の戦争で愛兒、兄弟、を失つた者、悪人を失つて人生を泣き暮らす者は幾人もあらう!! 米國人の母、イタリイ人、ドイツ人、英國人の母、すべての母の氣持は一つであらう。人の母の涙、恐怖、收容所、隔離、三年の月日がたつた。元氣であつた母は急に衰へて来た。「我が子、我が子」さうした苦しい生活をして来た母は朝から晩まで息子の事ばかり思つてゐる。読めもしない英字新聞をキヤンテンで買つて来て蟲眼鏡で見えてゐる。若しや我が子の名が——人に笑はれる様な事をしないか。若しや戦死。さういつた母の心配は日に日に深くなつて来る。読めないけど、母は魂で読んでゐるのだつた。同胞の母、吾界中で呪はれた母の存在、こんな入り混つた悲しみ……狂つたやうに泣き続けた母だった。けれども母は泣き疲れると心が落着き、過ぎ去つた日の息子の想ひ出を大佛のやうに黙つてゐる父に云つては胸を晴らせた。さうして翌朝必ず父が作つた野菜か、農園から持つて来た大根を漬物にして息子に送つてゐた。



或る日息子から電話がかゝつて来るといふ通知があつた。母は喜んで蹴くちやになつた顔にバニシング・クリームをつけて、メイン・オフィスに出かけて行つたが、晩まで待つても何の沙汰もなかつた。

その事を信子が夫に言ふとカン／＼になつて、翌朝夫と三人で行つて催促するとやつと取次いで呉れた。さうして一時間待つて漸く電話がヂン／＼鳴り出した。母の瞳はカツと光り……息子だ……と直感すると。

「勇、勇」と人目もかまはず太嵐が吹いて来たやうな勢で電話機にすがりついた。恥も外聞も忘れた母。「マ、マ、お元氣ですか会ひたい」と盛んによんでゐる。母はもう胸がパツと燃え、言葉がつまり、唯我が子の名ばかり叫んで涙をぼろぼろこぼしてゐる。時間が切れた。たつた五分間であつたが母は満足してゐた。何となく息子の心が母を占領してゐる。母は子供のやうに喜んで家に帰ると、息子の好ぎだつたお壽司を作つて寫眞に供へ、近所の子供達を呼びあつめ一人悦に入り、息子の話をして聞かせた。さうした母を思ひ、しなびたカチ／＼のお壽司に瞳を落とし、信子は立ち上つて窓を開けた。

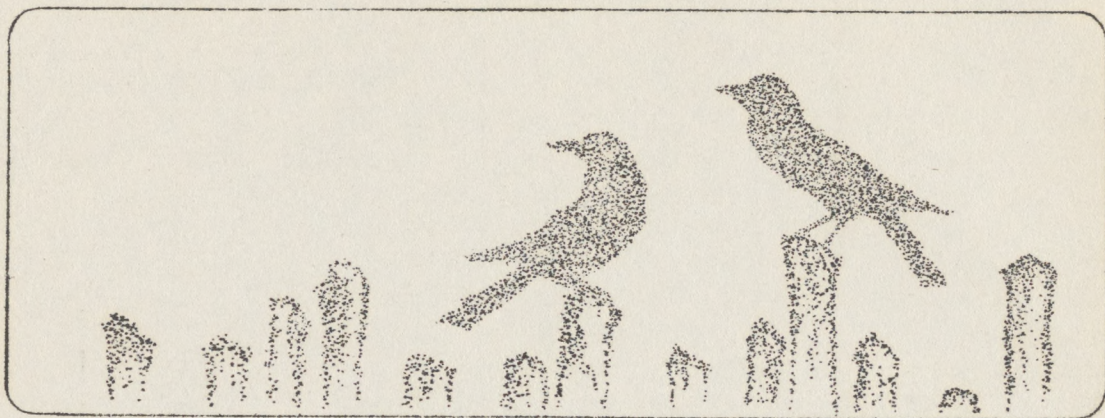
X

X

半開きにした窓から青空が覗いて、その綺麗な空を見てみると大西洋が見えてゐる様な錯覚に囚へられ、今に兄がニコ／＼して下ら帰つて来るやうな気がした。

「お兄さん……」信子は呟いたが、そのくせ心は泣きたくて堪らなかつた。





# 沈黙の輕蔑

水戸川光雄

音もなくドアが開くと大木が帰つて来た。忍び足で僕の前を通ると、電燈もつけないで着物を脱ぎ始めた。「ヒー、ヒー」といふ、彼の息づかひを聞きながら、大木も随分變つたな—と思つた。いくら遅く歸つて来ようが、誰が傍に寝てみようが、お構ひなしに二百燭光の電燈を煌々とつけて見たり、下品な長欠伸を連發させたものなのだ。それが近頃吾々へ遠慮した態度をとるやうになつた。恋愛が人の性格を變化させるといふことも、万更嘘ではない。彼が人間らしい行動をとり始めたのも淳子と交際<sup>つきあひ</sup>始めてからである。この四人か



らなる独身寮で彼一人が女友達を持つてゐるといふことに、後めいた申訳なきを感じてゐるところが面白いと思つた。眠れないまゝに、日本のことなど考へてゐた僕は、大木が帰つて来たことに何か救はれた氣がして彼と話したくなつた。枕元の夜光時計に眼をやると十時を一寸廻つてゐた。

「達ちゃん、今夜は馬鹿に早いぢやないか——」と暗闇に声をかけると、

「なーんだ、まだ起きてるのか。」と吃驚したやうに、云つて僕の方へ向き直つた。

「のぼせたんだ。咽喉が痛くて寝れないよ。」

「全くだ、この中はバカに暑いぞ又ニ之村が焚いたんだらう。」と石炭のことになると直ぐニ之村を攻撃するのである。小男のニ之村は朝から火がなくてはやりきれない男で、暇さへあればストーブの傍に喰付いてゐた。雪でも降る日には、室内は氣味悪い程温度をあげてゐるのが常である。反対に寒さを好く大木は、不平面で、コールを投込むニ之村を睨めつけてゐた。今にも怒鳴り出しさうな權幕だが、ストーブの灰を出すのも、石炭を運ぶのも、毎朝皆が起きる迄に部屋を暖めてくれるのもみなニ之村の仕事だと思ふと、不平を云へない筋もあるのである。

「大木、今夜は話さうぢやあないか。」と切り出すと、

「うん……いゝな。」と素直に肯いた。

「淳はどうしてる。長いこと話も聞かないが……」

「彼女か？ フン面白くないよ。」



「今晚もあそこだらう。」

「さうだ。」

「随分の評判だぞ。」

「何が？」

「君達の結婚さ。」

「シエーツ。冗談云ふな。君まで俺を馬鹿にするのか。」

「馬鹿ぢやないよ、古評は事実その通りだ。もう時間の問題だと云ふ人もある。」

「思ひたくば思へ、俺達の交際が解るものか。」

「とかなんとか云つて……その證據に日参してゐるぢやあないか。」

それには大木はいつも、グツと詰るのである。彼は極力淳子と恋愛はしてゐないと主張したがるのだが、毎晩押かけて行く事実からすれば、甚だ辻褄の合はないことになる。

「藤間——俺はそれが癪なんだ。」

「と云ふと。」

「遊びに行くから恋愛してると考へる考へ方だ。古いよ。」

「あたり前だ、嫌ひで行けるか。」

「下卑な言葉を使ふな、好きとか嫌ひは別問題だ。」

「ぢやあ気が合ふんだナ。」



「まあ、そんなところだ——然しそれは昔のことだ、今はもうそんな豪気なもんぢやあない。」

行きがかり上、大木が如何にもあり觸れた恋愛をしてるやうな会話を交したが、彼等二人は古間が噂する如く熱烈な道を進んでゐると思つてゐなかつた。少くとも大木たる人間が、どんなものを淳子に希んでゐるかぐらゐ、一年間も同居してゐたら感づけるのである。二人の性格にしても、峻嚴な徳義心を持ちながら表面冷然としたニヒリストの大木と、繊細な感情を持った淳子との組合せには相當な波瀾を予想せずには居られなかつた。いつであつたか、大木が話したことがある。——僕達二人の交際は實に不思議なんだ、顔をあはせたら何でもないことに攻撃しあつて、もう二度と逢ふものかと思ふんだが、翌日はケロリとしてゐるんだ。藤間が俺達の会話を聞いたらさぞ吃驚するだらう——。と其の時は、——愛情細やかといふ奴だ畜生！と僕は云つたが、肚では別のことを考へてゐた。彼等は半年も交際ながら、最初の一步を少しも出てはゐない。馬を合せようと努力する恋愛は實に馬鹿氣きつてゐる。彼等の家庭生活を思つただけでも身の縮む思ひがした。大木の悩みも其處にあるのだ。僕は古評の尻馬に乗つて彼の情熱を煽ることの危険性に氣がついてゐた。いつか一度やつくり話して見たいと思つてゐた。「今はもうそんなに豪氣ではない。」と大木が告白したのを機会に彼を發いてやるのも無意味ではないと考へた。



「大木、恋愛に失敗は附き物だが君も其轍か……」

「失敗といふ程でもないが、感情的にくづれかゝつてゐるのは事實だ。」

「性格の相違だナ」

「どこといつて缺點はないと思ふが、淳の全部が好きで、彼女の全部が嫌なんだ……解るかへ藤間——」

「解るよ、無理をしてるな。恋愛は無條件だといふぢやあないか、愛は奪ふものではなく、與へるものださうだ。」と此の前読んだ『ノクターン』といふ小説の一節を想ひ出してさう云つた。大木は暫く考へてゐたが、

「例へば、此の間僕の青春記、ホラ例のやつだ、あれを見せたのだ。それからはずつと気まづくなつて、ワヤよ、遂々僕を猫被りにしてしまつた。」と云つた。

彼の青春記とは、日本を去る前の日迄交際した一女子学生の手紙を纏めたものをいふのである。大木にして見れば、あの二十才前後の清い情熱は一生に二度とあるものではない。永久に忘れてはならないものだと思ふのである。大木の祕藏物だけあつて、よれ／＼になつた長い角封筒を、継ぎ合せ、継ぎ合せて、辛うじて筆蹟を留めてゐる。それどころか、其のせへ送つた彼の手紙のカビまでつけてあるといふ実に念の入つた記録である。それを通して見る大木は、慥かに早熟な不良青年であつたと思へる。然しあの頃の気持は一概に批難出来ないものも含んでゐる。十九才といへば、青春期に入らんとした刹那だ。彼等は盲滅法な激情を



「どん／＼無軌道に走らせることに依って僅かな慰めを求めたに過ぎない。昭和十二、三年頃の女学生は、勿論中学生もさうであつたが墮落の絶頂にあつた。地方新聞が卒業前の女学生に、「どんな男性と結婚しますか」と質問書を出して得た結果が、大学出の会社員、年齢は三十五才といふ答が八十九パーセントもあつたといふ時代だ。その時勢を通して、その犯罪を犯して未だ僕にはちつとも不思議はないのだが、見せた相手が女であつたといふところに、この問題の重要性があるのだと思つた。猫被りと云はれて、大木は眞面目だから、ひよつとすると自分さえさうかも知れないと自分を疑がつたに違ひない。

「記録と云ふが、あのカピもかへ」と僕が念を押すと、

「勿論一切がつさいだ。」

「そいつあゝ酷いよ、当り觸りのない程度でよかつたのではないかなア」

「だつたら見せる必要はないよ」

全くさうである。自分の都合を勘定に入れて算盤が弾ける大木ではない。

「淳は何と云ふんだ」

「何も云はないよ」

「ぢやあ、ノー心配ではないか。」

「いや、云はないといふことは淋しいよ、腹が立つたら立つたでいい、それを僕に云つてくれたら問題はないよ。然し沈黙で輕蔑されるのは辛い。淳はわざと素



気ないふうをして、欠伸許りするのだ。」

その話を聞きながら、僕は淳の取り澄ました顔を胸に描いた。喜怒哀樂を表はさないのが婦徳だとは誰でも知つてゐる。大木の如き情熱家に対するに、果してそれでよいのであらうか。わざ／＼余計な青春記など見せた大木は、現在の淳子に満足してゐないといふことを表はしてゐる。自分を投出して彼女の反響を試し、彼女の容易に出しさうにもない情熱を掻き立てて見ることによつて、一歩進んだ氣持が湧いて来ることを常に予期してゐたに違ひない。然し彼は綺麗に恥をかき、見事な背負投を喰つてゐる。それは一人大木のための焦燥ではない。理性を深く覆つた、知的女性といふものは、或る偽りを匿し紛らさうとする小智慧にしか受取れないのである。たとへば／＼な感情でもよい。信頼と尊敬を卒直に表現出来る恬淡な女の方に幾倍かの魅力を感じる。音楽はシンフォニー、文学はドストイエフスキー、詩はバイロンと即座に應答出来る女は実に滑稽でドライだ。吾々の階級には、そんな上べの見掛け倒しは、あまりにも底が見え透いてゐて白々しい。大木にしても、僕にしても年齢に不足はないのだから、徒な女交際つきあひはやれと云つても出来つこないのである。大木が淳子に行つたも、決して音楽を批評し、文学を論ずるためではない。もつと現実的な、たくましいものを求めてゐるのである。どす黒い現在の生活から再び起ち上るべく、吾々は考へ続けてゐる。宗教家と教育家に身を任せる時代はもう過ぎた。自分の力で、目の前の問題一つ一つを研討



# 原稿募集

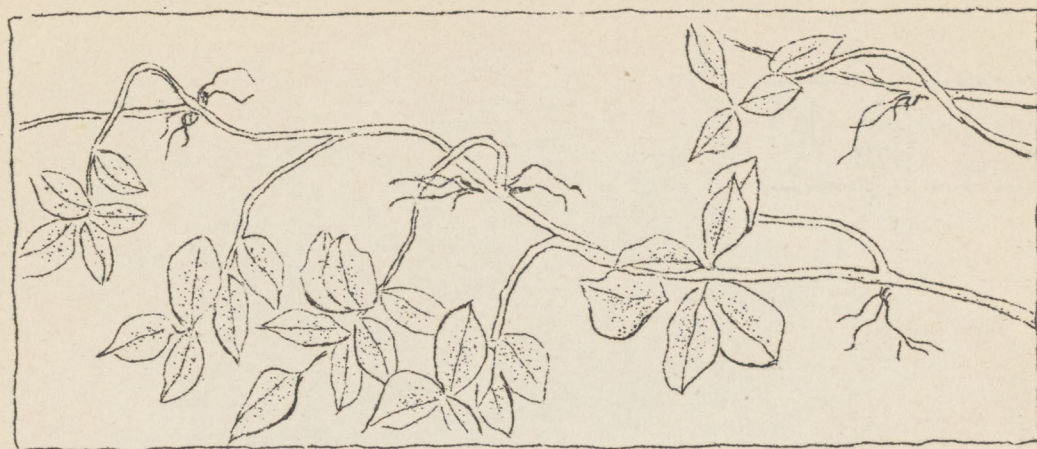
し處理して行かねばならない程時勢は切迫してゐる。結婚は日本へ歸つてからといふ一時的慰安の言葉には、もう誰も眞実性を認めない。それ程、研ぎ澄まされた時勢になつてゐるのに、堂々廻りをしてゐるのは社会ばかりである。一体此のセンターに、素裸の男を助け鍬を擔いで汗を流すことを、實際問題として考へて見た女性か一人でもあるだらうか。社会といふ大きな力へ怒鳴りつけて見たところであらう。あかないことは知つてゐる。それは大きな幻滅だ。大木が淳子を通して得たものは果して何であつたか。それも幻滅の一語に盡きるのであらう。泥濘に立竦んだ大木の手を引張つてやらねばならない。

再び時計を見るともう十一時であつた。たて続けに吸つた煙草が、部屋中に拡つてゐた。到底眠れないとは知りながら、「大木もう寝よう」と云つたが大木の返事がなかつた。気が付くと、彼はもう幽かな鼾を立てゝゐるのであつた。

- 一 創作・隨筆・詩・其の他
- 一 作品の取捨は編輯者に一任
- 一 原稿は一切返戻せず
- 一 住所姓名明記のこと
- 一 宛名は「〇〇-B「鉄柵社」

鉄柵社





# 流される者

野沢 襄二

人間は常に環境の支配を受けてゐる。人間の生活とはその環境に適應してゆくことである。人間は動物とちがつてその環境を不変のものとはせず、自ら新しい環境をつくつてゆく。それがつまり文化なのであるが、自らつくつたものも、一旦つくられてしまふ時にはそれをつくつた意志に反したものとなることもある。氣に入らない環境だからと言って、片っぱしからそれをつくりなほすといふやうなことはできないので、人間の生活は結局環境をつくるより環境に適應するといふ方が多



いのである。

これは作家谷川徹三氏が言つてゐる言葉である。私は此の言葉を思ひ出すたびに、今日の私達の境遇を思ひ、学生時代その堅実性を評判されたが、軍隊に入つてからすっかり人間が變つてしまつた兄のことを思ふのである。

私がデンバーの近所に季節の仕事に出て、それも終りに近づいた頃のことである。或る日兄から「近々のうちに秋原静子と結婚するかも知れない。君も機会があつたら仕事の歸りにでもその女に会つてくれないか。そして君の感想を聞かして呉れ給へ」といふやうな文面の手紙を受取つた。何分突然のことであり、兄にそんな女があることを全然想像もしてゐなかつたので、私は此の手紙を読んだ時面喰らひもし、また一寸不快にも思つたのである。といふのは何時海外に派遣されるか予想も許されない軍人の身でありながら、自分の本能を生かすために一人の女性の自由を結婚といふ條件の下に拘束してしまふことは、なんとなく未知の女性秋原静子に対して気の毒なやうに思つたからだつた。それともう一つは、今日までピツタリといつてゐる私と兄との間に侵入者を迎へたくないといふ感情が動いてゐたのも事実だつた。或はかう言つた方が私の感情を適切に表現<sup>あらわ</sup>はしてゐたかも知れない。しかしその女性が兄を心から愛し、兄と本當に結婚する意志があるならば弟の私として何も眞つ向から反對することもなかつたし、また私が反



対しても言ひだしたら聞かない兄のことであるからと思つて、私は直ぐ承諾の返事を出した。

仕事が済んでキャンプへの帰り途、私は將來自分の義姉となる人の面影をいろいろと想像してみた。上品な人の好い義姉に捏造してみたり、意地悪な陰口ばかりきく義姉にしてみたりして、独りで胸を躍らせてゐた。秋原静子の家はデンバーの日本人街の端にあつた。何處から眺めても大して上等ではなさうなホテルだつた。ステツプを上つて呼鈴を押すと、暫くして六十近い老人が、御飯でも食べかけだつたらしく、口をもぐ／＼動かしながら「何か用ですか」と言ひながら出て来た。

「僕、こちらで何時も御世話になつてゐる柴山林太郎の弟ですが——」と挨拶をすると老人は「柴山さん？」と考へてゐるやうな風だつた。「はあ、兵隊の——」と私が言つても老人は柴山といふ名前が頭に浮んでこないらしく、暫く首をひねつてゐたが、そのうち「ちよつと待つて下さい」と奥へ引込んで行つた。私はすくなくならずその老人にガツカリした。娘と結婚の話まである相手の男の名前も知らない、静子の父親らしい老人の暢氣さを情なく思つたのである。奥の方では老人と静子の母親らしい女の人の声がしてゐた。「さあ、柴山さん？」静子の母親らしい人の声だつた。私は娘と結婚の話まで進んでゐる男の名前を父親は知らなくとも、せめて母親だけは承知してゐるだらうと、多寡を括つて廊下で泰然と構へ



てゐたのであるが、その母親らしい人まで兄を知らない口吻らしいのを聞いて、私は急に顔が赤くなつてくるのを覚えた。兄の言葉を信じて未知の娘に会ひに来た自分の厚かましさがたまらなく恥かしくなつてきたのである。その時老人が奥の方から出て来る気配を感じ、うろたへ出した私は、挨拶もしないで慌て、静子の家からとびだして来てしまつた。外に出た私は自分の阿呆らしさにも呆れたが、兄の独りよがりな己惚れの強さにほと／＼感心してしまつた。

私がキャンプに歸つてから兄はよく来た。私がツールレーキに来る三ヶ月経前まではだん／＼遊びに来る度が激しくなり、殆ど毎月のやうに来てゐた。ひどい時には日曜の朝来てその晩に歸ることもあつた。

兄は来るたびに廿への贈物だといつては高價な首飾りや、キャンプでは誰も使はないやうな立派なハンドバッグなどを買つて来た。そして「おい、これどうか、ヘレンに似合ふと思ふか？」と私に見せながら自分の首に掛けてみたり、脇の下に挟んでみたりして、ヘレンの嬉しさうな顔を想像しては一人悦に入つてゐる兄だつた。私はさうした兄を見てゐると馬鹿に人間が貧弱にみえてしかたがなかつた。

「贈物もいいが、結婚する意志がなかつたら金銀類なんかやらない方がいいか、やないか」



「俺は結婚してもいゝと思ってるんだ」

「しかし相手はまだ十七ぢやないか」

「十七だつていゝよ、俺が好きなんだから」

と、冗談とも眞面目ともつかないやうな口吻で言ふのだつた。

私は何時か兄が来たら秋原静子のことを質問してやらうと思つてゐながら遂に忘れてゐたのであるが、結婚の話が出て思ひ出したので

「あれから秋原静子との関係はどうなつたんだ」

と、聞いてみた。私は、兄がどんな表情をするだらうかと内心なものかを期待してゐたのであるが、

「あれはヘレンを知つたので諦めたよ。結婚といふ話もあつたわけではなく、俺がしてもいゝと思つただけなんだ」

と、平氣な顔をしてゐるのだつた。そして

「君には済まんことをした」

と、オドケたやうな表情をして、天井を向いて笑つてゐるのだつた。さうした兄の表情からは理智の閃きといふ感じはなく、頹廢的な人間が持つ一種獨特の自暴自棄といふやうな感じを受けるのだつた。

学生時代の兄は決して朗かとは言へなかつた。何時もなにか思索してゐるやう



な沈んでゐる人間であつた。叔父の家に寄宿して通学してゐたが、私が日本から来ると、「何も知らない弟にスクールボーイの苦しみは當分経験させたくない」と叔父が私にスクールボーイに行けとすゝめるのに反対して、そのかほりに兄が行つたのだつた。兄は何回か働き口を變へた。其の中には随分つらい家庭もあつたらしく、一週間つゞけて辨當にジャムのサンドウヰッチを学校へ持つて来たこともあつた。友達には時々スクールボーイの苦しさを話すこともあつたらしいが、弟の私には心配させたくないと思つたのか、全然そんなことを話さなかつた。

或る時学校で「此度のサタデーに掃除の手傳ひに来い」と言ふので、私はその日早く起きて行つたことがあつたが、兄の家を一望してガツカリしてしまつた。庭園も住宅もべう棒に大きかつたのである。兄はこの家の部屋を全部掃除し、夕食のクツクをし、その上洗濯までするのだつた。午後三時頃兄から指示された部屋掃除を済ませて、疲れた身体をひきずるやうにして地下室へ下りて行くと、色褪せたシャツを着、薄汚いパンツをいた兄は汗びつしよりになつて洗濯をしてゐた。私を見た兄は「まあ一服しろ」とすゝめながら自分は山のやうに一杯になつてゐる汚箱の中から洗濯物を取り出して別けてゐた。床に放り出された汚れ物の中には、白いシーツの間にはさまつて汚物の附着した桃色の女の下着が見えた。

私はこれを見た時、兄が哀れに感じられてならなかつた。日本にゐるときは、



長男として父母の寵愛を一身に受け、欲しいものの振舞をしてゐた兄が、アメリカで女の汚れた下着まで洗つて、苦学してゐるのかと思ふと堪らなくなつてきた。私は逃げるやうにして兄の傍から離れ、便所に入つて泣いてしまつた。私はそこでながいこと泣いてゐた。

その後しばらくして私は旅に出てしまつたが、大学を目指してゐた兄は懸命に勉強を続けてゐた。ハイスクールを出、ジュニヤーカレッジを五月に卒業した兄は九月に東部の大学へ行くことになつてゐた。日本から学資を送ると言つてきたらしかつたが、兄はそれを断つて、晝は野菜屋に働き、夜は白人デパートメントの掃除夫として、二つの仕事をとつてゐた。夜おそく仕事から帰つた兄には、満足に睡眠をとる時間もなかつた。それでも三ヶ月後にはやう／＼血と汗で三百弗ちかい学資を蓄へた。兄は希望にもえて東部へ行く準備を調べてゐたが、八月十四日突然召集されてしまつた。それ以前から、徴兵される疑懼があつたので、方々へ手を廻して運動してゐたのだがたう／＼効を奏さなかつたのだ。

入營の日は雨が細々と降つてゐた。その雨のなかを叔父に自動車でサンタモニカのロバート兵營まで送つてもらつたのであるが、その間、兄は一言も喋らなかつたさうである。たゞ車窓から流れる雨の日の街景色を見て溜息ばかりついてゐた。そしてとき／＼「宿命だ、宿命だ」と独言を言ひながら涙ぐんでゐたさうである。



それから二年半席の温まる暇もないほど方々の兵營を移動しつゝいて、カンサスの兵營に落ちついた頃の兄はすっかり人間が變つてゐた。何回か除隊の運動に失敗して、一度は營倉まで食つたことのある兄は、学生時代のやうな眞面目な男ではなく、すっかり享樂的な人間になつてゐたのだつた。

兄はキャンピングに遊びに来て、歸る時には必ず「ヘレンとは氣も合はないし、子供っぽくて面白くないから當分来ない」と淋しさうに言ふのであるが、一ヶ月もすると又ノコノコと遊びに来るのだつた。その日も丁度私が洗濯を済ませて部屋へ戻つてくると兄が来てゐた。田山と話してみたら兄は私を見ると、「着物を貸せ」と言ひながらさつさと軍服と着變へてしまつた。兄の話によると、ヘレンの憧憬的は腕章三本を持つ軍曹にあるらしく、腕章一本の兄では何んとなく物足りないらしかつた。だから兄が来るたびに「まだ一本か一本か」と詰問するのだが、また兄にはそれが非常につらかつたらしい。

夕食後小一時間ほど私達と軍隊生活の話などしてゐた兄は、時計が七時を指してゐるのを見ると、いきなり立上つて、小さい手提鞆から首飾りを取り出し、ポケットに入れると、そのまゝヘレンの家へ出かけて行つた。田山も何處かへ出て行つたが、行くあてもなかつた私はシヤワーをとり、寢巻のまゝソファア！に寢轉んで本を読んでゐた。



隠し切れない嬉しさを表情に逞へて兄は十時頃ヘレンの所から戻ってきた。「何處へも行かなかつたのか」と言ひながら私の傍に坐つたまゝ兄はしばらく黙つてゐた。肱掛に頸膝をしてなにか考へてゐるやうだった。そのうち兄は「変なことを聞くやうだが」と前置きしていきなり突拍子もないことを言ひだして、私を吃驚させた。

「サは接吻する時どんな表情をするものだらうか」

「いや、接吻の時眼を開けてゐるのか」

「さあ、大抵開ぢるんぢやないか」

「しかし変だな、ヘレンは眼を細く開けて俺の顔を覗くやうにして見てゐたんだが——」

兄が何時になく嬉しそうな顔をして戻ってきた理由がわかつた。兄は首飾りの代償を得てきたのだ。しかし私はこれを聞いて兄が情なかつた。サの秘密として飽くまでも守つてやるべきことをノケノケと、如何に弟の前だとはいへ喋つてしまふ兄が頼りなかつたのだ。そして兄とヘレンの悪愛が如何に眞実性を缺いた遊戯的なものであるかを知つたのだつた。

それから二日後、ひどく興奮してヘレンの家から戻ってきた兄は、私が止めるのも諾かず急いで歸り仕度を始めるのだつた。幾ら止めても兄は諾かなかつた。



さうにして影をひいて行く兄を見送つて、私は「もう来るな、もう来るな」と心の中でつぶやいてゐた。

兵營に歸つた兄からは度々手紙がきた。生活への不満がたえず文面に漂つてゐた。そして手紙の終りには何時もヘレンのことが二、三行書かれてあつた。あんなに怒つて歸つても兄はやはりヘレンが忘れられないのだ。兄が歸つたのち、ヘレンが若杉と腕をくんでダンスに行つたり、ズーツパンツをはき、頭髮を見苦しいまでに伸ばし、油をこて／＼塗つて、女の斷髮のやうな恰好をした不良青年達と夜おそくまで暗いところでベンチに寝そべつて涼んでゐるのを、私は知つてゐたが、兄には黙つてゐた。根まで枯れ果てゐる現在の兄の生活にあつて、唯一の慰安は女なのだ。愛する女との逢瀬を夢みることのみが彼等に許された唯一の特權なのだ。私は兄の夢を壊したくはなかつた。自然と自ら崩壊されてゆくのを遠くから見守つてゐてやりたかつたのだ。

その後一ヶ月しても兄は来なかつた。手紙もぶつつり来なくなつた。當分来ないことを心の中で祈つてゐた私ではあつたが、いざ本當に姿を見せないと、やはりなんとなく寂しかつた。ことによつたら前線に派遣されたのではないかと、不吉な空想を描くこともあつた。不安になりだした私は、たて続けに二本も手紙を送つたが返事は来なかつた。



音信を絶つてしまつた兄のことが、溶けきらない澱みのやうに私の心で蟠まつてゐたが、私はツールレーキへ旅立つ日が迫つてゐたので、いつしか兄のことは忘れる日が多かつた。

丁度その日も、旅の買物をするため田山と一緒に街へ出掛けて行つた。二人とも一通り買物を済ませ、なにか冷たいものでも飲まふとドラグストアへ入りかけた時、バスから降り歩いて来た兄と私達は偶然に逢つた。ハンカチで額の汗を拭きながら、兄は、いゝところであつた、暑くてたまらんから一杯飲まふ、といかにも田舎らしい薄汚ない感じのするビヤホールへ入つていつた。田山は用があるからと断はつて、一人で一足先きに帰ることにした。

風通しの悪いのと、店内一杯に漲つた煙草の烟りで噎せるやうに暑苦しいのもかまけず、隅のボックスに坐つた兄は、私にも飲めとすすめながら、コップになみ／＼と注がれたビヤをゴクウゴクウと甘まさうに二三杯つづけさまに飲み乾した。私はビヤを口にしながら、ながいこと未なかつたが僕からの手紙は受取つたのか、ときいてみた。

「ずっとあとで受取つたんだ」酒でほんのりと赤くした頬に微笑を浮かべながら、兄は元気よく答へた。

「返事ぐらゐ出して——」

「いや、気狂ひの眞似をして病院に入つてゐたんで返事も書くわけにいかなくなつ



仕方なく私はゲートまで送って行くことにした。メスホールではウエイトレス達が夕食の仕度を忙しげにしてゐるのが見えた。丘の上から見る格州の平原は、土地の豊沃を物語るかのやうに見渡す限り青々としてゐた。地平線の彼方まで続いてゐた。平原を横断するアーカンサス河が太陽に反射してキラ／＼する。まるで濃い色彩画を見てゐるやうな感じだった。道辺には葉を一杯にもつた夕顔がながく影をひいてゐた。カクタスもあつた。沙漠の孤獨な寂寞さを思はせるセーデブラッシも夏の喜びを謳って青々と繁つてゐた。私達は無言のまゝ歩いた。うなだれた兄の姿は常になく弱々しい感じだった。歎息とともに兄はときどき「俺は當分来ないよ」と言つた。私は兄の恋愛が眞実性を缺いた遊戯的なものであることを知つてゐたが、かうして打碎かれて沈んだまゝ冷たい兵營に歸る兄を思ふと、肉親の情として一緒に兄の悲しみを嘆いてやりたいやうな氣持になるのだつた。ゲート間近くなつた頃、兄は「甘んじてみんな八方美人だ」と吐き出すやうに言ひながらヘレンのことを話すのだつた。

ちやうど家人は留守で兄とヘレンが差向かひで話してゐる時、ノックをして若杉が入つて来た。親しさうなところを見られたヘレンは困惑したやうな様子だったが、直ぐ若杉を外へ連れだした。二人の話し声はハッキリとは聞きとれなかったが、若杉が、今晚の活動にヘレンを誘つてゐるらしいかつた。ヘレンが直ぐ若杉の申し出を断けることを兄は望んでゐたが、ヘレンは断はるどころではなく、若



杉に甘えるやうな態度でなにか哀願してゐるやうな風にさへ感じられるのだつた。自分が兵營からヘレンのところへ遊びに来てゐるのを知つてゐながら、ヘレンを誘ひにくる若杉の図々しさも憎らしかつたが、それ以上にキツパリとした態度がとれないで、或る媚態を示しながら、若杉に哀願してゐるやうなヘレンに堪まらないうらだたしいものを感じるのだつた。その上自分にだけ特別な親しさを見せてくれると己惚れてゐたのに、若杉にまで自分と同じやうに甘つたれた話し振りをしてゐるのかと思ふと、兄はもう我慢が出来なかつた。怒鳴りつけたい、叩きつけてやりたいやうな衝動にかられて来た。兄は今自分が抱いてゐる感情が、完全にヘレンに対する嫉妬であることを感づいてゐた。そして、さうした感情を露骨に現はすことが男の体面を汚すことも知つてゐた。しかし此の場合そんなことはどうでもよかつた。たゞ自分の愛情をヘレンに見すかされるのが嫌だつた。兄はちつと坐つてゐた。壁に女の繪が貼つてあつた。女優らしかつた。兄はそれを見てゐるうち、ヘレンが此の女のやうに、唯美しいといふだけでなんの取り得もない下らない女に思へてくるのだつた。そして其の下らない女のところへ通つて来る自分は、男と話してゐるのをぼんやりと待つてゐる自分は、此の世の中で一番價値のない人間のやうな自己嫌惡に陥るのだつた。兄は若杉が歸ると同時にヘレンが縋るやうにして止めるのも諾かずに歸つてしまつた。

兄はゲートから出て行く時、「當分来ないよ」と言ひながら歸つて行つた。淋し



「たんだ」

ぐうつとビヤをひつかけて、兄は来たくとも来られなかつた理由をなが／＼と話し出した。

或る暑い日の午後だった。その日突然なんの予告もなしに兄の中隊だけ強行軍することが發表された。皆は慌て、ゲートルを巻き、銃を持つたりしてゐたが、朝から上官と口論をしてむかつ腹を立てゝゐた兄は、仕度もせず、銃も擔がずに行軍に加はつた。四列縦隊の内側で歩いてゐた兄は、はじめの間無事だったが、そのうち朝口論をした少尉に發見されてしまった。兄は罰として銃を双肩に擔はされた上、中隊の殿りに廻されて、少尉の監視を受けながら行軍することになった。眞夏の太陽は遠慮もなく、焼きつくやうに暑かつた。二挺の銃を擔がされた兄には暑さが一層激しく感じられてきた。身体は汗だらけで、ベタ／＼と下着が肉体に附着して氣持が悪かつた。額から流れ落ちてくる汗を拭かうとして何回か行軍から遅れさうになった。その度に少尉は激しく兄を叱責した。最初はそれ程でもなかつたが、次第に肩の筋肉に銃の重量が加へられてくるのを感じるやうになった。遅れさうになつては駈け、遅れては怒鳴られた。それでもどうにか行軍についてゐた兄は、身体がだん／＼前屈みになり、口からは荒い吐息が連続的に吐かれるやうになつて来た。道に咲いてゐる向日葵の花や夕顔の花の一輪々々がぼーつと霞んで見えなく、たゞ色彩の輪が眼前で動いてるやうな感じだった。兄



はもう我慢ができなくなつた。理由もなく軍律を侵した自分の愚かしさが、遠くなりかけた脳裡の奥で後悔してゐたが、いすにも倒れさうに弱りきつた自分を、悪魔のやうに微笑みながら眺めてゐる少尉の憎々しい瞳を感じると、兄は「どうにでもなれ」と、太々しい捨鉢な氣持になつてきた。その時、フラ／＼とよろめいて少尉に怒鳴りつけられた兄は、抑壓してゐた感情が狼煙のやうに爆發して、くるのを心中に感じた。無意識のうちに少尉に向かつて銃を叩きつけてゐた。不意を喰つて危ふく身をかはした少尉は、狼狽しながら何か怒鳴つたが、兄にはもう何がなんだか解らなかつた。少尉の声を聞いて、前方から牛のやうに大きい軍曹が慌てゝとんでくるのがぼんやりと見えた。若しかしたら殺されるかも知れない。そんな不安が脳裡を稲妻のやうに走つた。兄は自分のとつた行動の反動が恐ろしくなつて、道の真中に坐つて泣きだしてしまつた。そしていきなり上着と下着を脱いで裸体になり、「さあ殺せ、さあ殺せ」と、日本語で喚きだした。銃を叩きつけられて顔から血の氣がなくなるほど怒りに燃えた少尉は、兄の意想外な狂態に度膽を抜かれて、駈けつけてきた軍曹と共に呆然としてつゝ立ってゐた。兄の號泣と喚き声はながいこと続いた。少尉も軍曹も、裸体になつて異様なことを喚いてゐる兄が無氣味になつてきたとみえ、兄が銃を掴んで立ち上つた時、後退りをしたかと思ふと、そのまゝ逃げだしてしまつた。

「俺はその時本當に泣いた。そして泣いてゐるうちに自分の境遇が無暗と悲しい



がちらりと光った。信吉は眼を窓に移して見た。雪が降つてゐた。

「忙しいですか」

先刻まで腰を下して待つてゐた青年が、受付の前に来て立つてゐた。

「いや」

信吉が答へると、

「小さいルームを一つ貰へないでせうか」

と青年は小声で言つた。

「新家庭ですか」

「はい」

「ブラックの〇に今空いてゐる處が一つありますよ。一週間前天婦で住んでゐましたが、布哇に帰つたらしいんです。若し、其處でもよかつたら……」

「広いですか」

「四ビームですから、丁度いいでせう」

「では其處にして下さい」

新家屋の方であれば三ビームに決つてゐるし、古い方の四ビームの方が広いので、自分の新婚の<sup>すみか</sup>極處を青年は簡單に決めた。

「近頃、結婚するのが多くてね、家屋部も困つてゐますよ」  
<sup>ハウジング</sup>

カウンターの下から移転手續用紙を出して信吉は言つた。



「空いた部屋がないんですか」

「今のところ、都合をつけようと思つたら出来ますが、このまゝで行けば、やがて駄目でせう」

「いい時に結婚することになりましたね、僕は」

信吉の親切に對して、喜びを表明してゐるやうに青年は冗談ともなく言つた。

「御名前は何？」

「広吉順一」

「妻の名は？ アイミーン、新婦の名は？」

「道子です」

順一の名の下に「アイミーン」と書き終ると、ふと、沢村道子の理智的な顔が信吉の頭に浮いて来た。この男が、道子と婚約したと言ふのは？ 鉛筆を握つたまゝ、信吉は紙面に眼を落してゐる広吉の顔を凝視した。濃い眉の下に小高い鼻が流れ、その下にニコチンに脂割れのした唇が軽く閉つてゐる。こんな男を美男といふのだらうと信吉は思つたが、ふと広吉に上げることになつてゐる部屋は、自分と同じブラックにあると気がついた。これから朝夕道子とも顔を合はすのかと考へると、憂鬱な重苦しい壓迫を広吉からも感じて来た。広吉の睫毛が上に動き、眼球が大きく見えたので

「ではしばらく待つて下さい」



と言つて、信吉は奥にゐる女事務員にタイプして貰ひに行つた。戻つて来た時には三枚の用紙を握り、一枚は自分でキープして、二枚を広吉に渡した。

「一枚はキープして、一枚はブラック・マネジマーに渡して下さい」

「どうも済みませんでした」

「それからツラックはムーブする時によこすから……」

「やゝ有難う」

広吉が戸外に出る時も、信吉は彼を見てゐた。彼の着てゐた茶褐色のジヤケツがその日一日信吉の頭に残つてゐた。

沢村道子が婚約したことを信吉は一ヶ月前から聞いてゐた。その前まで——キヤンプが出来て以来——信吉はよく道子の家に遊びに行つた。安樂を目的にして少し奥深に造られた椅子に、壁を背にして彼は何時も坐つた。その眞正面には寢室を区切つたプラスチック板の白いパテーションがあり、その下に粗製のごつい椅子に座蒲團を敷いて坐つた道子が、編物をしたり、爪を磨いたり、多くの場合は靜かに小説を読んでゐた。道子の母がゐる方が話するのに自然で樂であつたが、母の留守を密かに希望する彼の眞実な若い心もあつた。二人限りになる時には、沈黙になりがちな空氣に、若い男女の存在を強く意識して、何かを話さねばならぬと思ひながら、やはり黙つて、自分の口から吐き出される煙が、煤けた天井に炎



い影を動かしたり、編物をしてゐる道子の手の円い肉付や、身体を暖めてゐる赤いスエターの脹らみや、電燈に映えては彼女の額に影を寫してゐる髪の毛のなよ／＼しさを眺めたり、パテーシヨンに貼られてゐる米國のスマートな軍服を着た二枚兵の寫眞の二つ三つに眼を移したりした。彼は兵隊の寫眞を見る度に、單に米國兵といふ概念だけではなく、歪曲された妙な嫌惡を感じた。彼は兵隊を追ひ廻したり、キャンプの中で兵隊と腕組みして歩いてゐる女に、時代やラデオや宣傳に擔がれた輕薄な人間の、重宝な時代の玩具になつた、眼に見えない弱さを見た。彼は道子に愛を感じ、兵隊の寫眞にまで強い嫉妬を感じてゐた。

道子の頭の上のパテーシヨンには小さな玩具の下駄が二、三足、赤や緑の毛糸の紐のついたまま、何時もぶら下つてゐた。その横には「エス」と彫られたハート型の小さな胸飾<sup>ラケット</sup>りが幾つもあつた。一本の鋭い矢が二つ心臓を貫いて露骨に愛情を表現したのもあつた。彼女を知つてゐる多くの男性から貰つた物である。信吉はそれを見る度に、自己の愛を大膽に、卒直に、何の蟠りもなく表徴して、自分の好きな女性に上げることの出来た男に、平凡な大衆的なものに対する、教養の孤独から来る羨望を感じた。

一度、信吉は便所の境板に斜めに切りれた木の節を發見した。木の節には脂<sup>ヤニ</sup>が滲んで居り、磨くと光澤が出て来るので、木の節で色々の細工をするのが流行した頃である。彼はその節を指先で強く押して見た。板は最初二重になつてゐたが、



板不足の爲に誰かに半分まで剥ぎ取られてゐた。節は反対側に抜け落ちて、人間の眼玉程開いた穴に、信吉は人差指を突っ込んだ。指の根元が少し痛かった。彼が節を拾ひに行つて見ると、節は便器の中で小さな連の真中に揺れてゐた。彼はあたりを見廻した。誰もゐない。彼は安心して、親指と人差指で節を摘み上げ、パイプの水で二三度流した。だが、細工するのには彼は無器用だった。普通の男が小刀で彫つたり、それが爲に半日も暇を潰したりする氣になれなかつた。愛情の證<sup>あかし</sup>を見せる爲に、皆と流行を追ひ、女の名前を彫つて上げる安價な氣まぐれが、如何にも中味の空っぽな米國的であるのに氣がつくと、持ち歸つた節をそのまゝテーブルの上に置いて、時々それを掌で轉がしたり、鼻まで持つて来て嗅いだり、捨てゝしまはうかと思つたりしたが、どうしたのか何時までもそのまゝにして置いてゐた。

道子の誕生日が五月十八日であると、一度道子の口から直接に聞いた。信吉は道子の誕生日にこの節をそのまゝ何の細工もせず、節のまゝで上げようと思つた。彼は柔かい紙で節を包み、それを小さい紙箱に入れ、丁寧にまた紙で包み、ストア糸で巻いた。

「何のプレゼント？」

道子は不思議さうに問ふた。

「あなたの誕生日でせう」



信吉が答へると、

「さうだったのね。今日十八日？ 忘れてゐた。」

道子の母も初めて知ったやうな表情をして見せた。信吉の顔は赧くなつた。本人も其の母も忘れてゐたのに、自分だけがはつきり覚えてゐて、かうして何かを包んで来たのが、急に餘計なことでもしたと思はれて、恥辱めいた感情の波が肺臓に食ひつき出した。

「何かしら」

道子は嬉しさうに包みの紐を解き始めた。道子の母も首を延ばして見てゐた。

信吉は可笑しかつた。開いて見て、中から木の節が生きのまゝ出て来たら、彼の奇想天外の思ひつきに腹をかゝへて笑ふに違ひない。信吉は自分の茶目氣に悦に入つてゐたが、何かを期待して嬉しさうに箱を開けてゐる道子に、本當に喜ぶ眞の贈物をしたらよかつたと思つた。ことなくだらうなことをする時には、冗談めいた氣安さが湧いて来るが、本當に金を出して買つて上げる物には、彼の心の底まで見すかされるやうな、急に開き直つた重い氣がして嫌ではあるが、貰ふ方の喜んでくれる處では、木の節に名前を彫つて上げる人間の方がやはり高價かも知れないと思つた。彼はこんな悪戯をしたのを急に後悔し出してゐた。

道子はどう／＼紙を開けて木の節を見た。たゞの木の節である。彼女はしばらくそれを手に取つて見てゐたが、急に声を立てゝ笑つた。信吉の悪戯に對して笑



つたのか、大きな期待を裏切られた自分の気まづさを笑殺したのか、笑声の餘韻は空っぽに信吉に聞こえた。道子の母も笑つてゐた。

其の後、自分の新家庭を造るべく、広巾着がルームを掃除したり、何處から聚めて来たのか、なか／＼手に入らない板でパテーションを造り、クロゼットの位置を造り変へる姿を、それとなく二三度見たことがある。道子が一緒に手傳つて後、食堂ですまし込んで食べてゐるのも見た。信吉は自分から進んで挨拶しなかつたし、道子もごた／＼した食堂で信吉の存在を見出さなかつた。逢つたら逢つたで、挨拶なんか其の時にしようと考えてゐた。不思議なことにはそれから一ヶ月も経つたが、道子が結婚式を挙げたといふことも聞かなかつた。空部屋は依然として空部屋で、カーテンのない窓はシーンとしてゐた。何かの都合で、式を延期したんだらうと考へながら、今までよく道子を訪問して置き、道子に結婚する相手が出来たからとて、急に遠去かつてしまへば、自分の目的が道子にあつたんだと、足許や魂の奥まで見透されるやうな気まづさを感じ、偽善的ではあるが、結婚して行く道子に形式的な祝言でもと、信吉の足は道子の家に向いた。バラツクの黒い壁と壁との間に、解け切れぬ雪が凍つてゐた。

道子は家に居た。戸を開けて、「ハロー」と微笑したが、微笑が崩れて元の表情にならうとした底に、何か淋しいものが一緒に崩れた。



「ひとり？」

「ええ」

「お母さんは？」

「料理のクラスに行ったのよ、掛けなさい」

と道子は言った。信吉は同じ椅子に腰を下した。隔離前、道子がシカゴに出た  
いと言つて、母と口論した時、彼女は自分の存在には何の関心ももたないんだと、  
沈鬱な気持になったのも、不忠誠分子となつてツリーレーキに居残ると知つた時  
の喜びも、この同じ椅子の上で信吉は感じた。併し、道子は人妻になるのだ。す  
べてが遠い昔のやうな気がする。煙草に火をつけると、信吉は道子の後方にある  
同じパテーションに視線を投げた。其處には二重兵の寫眞はもうなくなつてゐた。  
良人になる広吉に遠慮して取り去つたのか。ツリーレーキの國民的雰圍氣を怖れ  
て隠してしまつたのか、信吉はちよつと考へて見た。この國に生れた宿命を祕め  
て、現実の峻しい行手に淋しい微笑を浮かべてゐる二重兵の、黙々としてすべて  
を受け入れた魂の弱さが、時代の反動といふ一つの飛沫だけで鉄柵の中に投げ込  
まれた自分の安らかさや、日々小さな不満と比較して、痛々しく見えて来た。  
道子に愛や慾望を失つた信吉の気持の変化であつた。ストーヴの中に石炭の破片  
が散つた。暖かいので信吉はスエターを脱いで側に置きながら、

「道子さんが婚約したと聞いたもんだから『おめでたう』を言ひに来た」



と言った。固苦しきはなかったが、隠された感傷を舍んだ眞面目な声だった。

道子は顔を少し上げたが、編物の目に又眼を落した。

「広井さんは家屋部に来てみましたよ、ルームを貰ひに」

と信吉は続けた。同じブラックですと、言はうかと思つたが、道子にも同じ気分が幾分あるに違ひないと思つたので、

「何時結婚式を挙げるの？」

と問ふて見た。道子はすぐ答へなかったが、後ではつきりと言つた。

「玉井さん、あたし婚約を解消したの」

「解消？ どうして？」

道子は答へなかった。冷やかに沈黙したまゝ、両腕で胸を締めつけるやうに、少し猫背になつて編物の手を上下に動かしてゐた。信吉は喜んでいいのか、同情していいのか、道子の仰向いた顔に視線を据ゑながら、心を持って行く場所を失つてゐた。何かあつたに違ひない。しばらくして、自分の感情を道子の問題にぶつつけた時、彼の頭もやうやく整頓されて来た。

「玉井さん、この靴下の片方はもう編んぢやつたの、今残りのを編んでゐるけど、出来上つたら、玉井さんに上げようかしら」

道子の方から先に口を切つた。冗談のやうだったが、婚約前の道子の普通の話



し声だった。信吉は笑つて見せたが黙つてゐた。一度結婚に破れると、今まで無視してゐた自分にも、愛情の崩れた破片<sup>カケラ</sup>を突きつける道子に、自分を瞳めた矜持が意地を含めて頭を擡げて来た。道子は、併し、女友達に話すやうに広吉のことを語り出した。

道子の父の友達に豊田といふ眞面目な人がゐる。以前同じブラツクにゐてよく遊びに来たが、二ヶ月前移転してしまつた。その移転した部屋の隣りが博奕場で、最初大きな處に移つたと喜んでゐたが、夜騒がしくて眠れない。将来小供までが博奕を覚えるかも知れないと心配し出し、家屋部に移転願ひに行つたが、空いてゐる處がないと言ふので、断られた。その豊田がよく博奕場に入りする広吉を見て、道子の父に注意してくれた。父母は道子が将来遊び人の良人を持つて苦勞してはと心痛したが、無味乾燥なキヤンプ生活だから、広吉も淋しかったんでせうと、本人の道子は別に氣にとめなかつた。広吉に対する強い愛を道子は初めて示したのであった。

「豊田さんは、あんたを生意氣だと言つてゐたわ。融通がきかないつて」

信吉は苦笑した。何時か家屋部に来て、教育上なんとか言つたピーコートの男の赧ら顔が浮いて来た。カチ／＼と鳴つてゐたチープの音なども…… 道子は話を続けた。

彼女のブラツクに女三人の住んでゐる處がある。二人は後家で一人の良人は戦



線に征つてゐることだ。噂であつて精しいことは知らない。その一人が饒舌で相手の悪口をよく言つてゐる。同室の女に情夫があり、その情夫が広吉だとはのめかしてゐた。広吉が後家でしかも三十五の中年女に夢中になる筈がないと信じてはゐたが、その女に強い嫉妬を感じ出し、自分の男を護る衝動にかられた。早く式を挙げたいと言ひ出したのも道子だった。

「そのお饒舌り女、僕のことを何とか言はなかつた？」

「いいえ、別に」

家屋部で彼を掴へて喋つてゐた女が、彼のことを言はなかつたと聞いて、信吉は面白い女だと思つた。

「それ程までに広吉さんを受しながら、どうして婚約を解消したんですか」

「――」

道子は又黙つてしまつたが、しばらくしてから抽出しの中から何かを探し始めてゐた。がサ／＼と掻き廻してゐる音がしたと思ふと、がチンと抽出しを開めて手に円い黒い物を握つてゐた。

「玉井さん、これ覚えてゐる？ 木の節よ、あんたの下きつた……。大切にキープしてゐましたの」

信吉は道子の掌にある木の節にちらりと視線を投げたが、今になつて見え透いたお母辞を言つてゐる道子を、内心輕蔑し出した。なんだ、この八方美人は！



「この木の節を下さったあんたの心が解るやうな気がするわ。他の人見たいに流  
行を追へず、それだからとて、何時も孤独でゐなければいけない気持を……ね」

「……………」

「最初玉井さんに会った時、玉井さんにどうしても親しめなかつたの。日本の社  
会制度みたいだったわ。四角ばつて。キベいの女は俗っぽいって、思想的なものや  
智的なものに理解がないって、玉井さんが言つてゐたと、誰からか聞いたわ。あ  
たしもキベいでせう。戦争前まで、心から米國化し、現実の上にあたしの幸福を  
夢見てゐましたの。だって、女にとつては米國はパラダイスでせう。あたしのや  
うな女をあんたは輕卒だとか、フラツパーとか、キベいの女は垢抜けがしないつ  
て、内心輕蔑してゐたんでせう。それがあたし、憎かつたの。でも今では解つて  
来たわ。ソーリレーキはこんな處でせう。あんたが見すばらしく見える程、あん  
たのよさが解るわ。だけど……………」

道子はこゝで言葉を切つた。何故彼女が廣母のことを言はず、信吉のことを、  
しかも今までにない語調で彼から受けた印象の總決算を吐き出したのだらうかと、  
信吉は理解するに苦しんだ。彼女の婚約を解消した理由の中に、自分の存在が大  
きな一つの役割を務めたんだらうか。それにしては彼女は広母を愛してゐたと、  
さつさはつきりと言つたではないか。彼女が婚約解消の理由を言はないところを  
見ると、彼女は自分を愛してゐたからと、それとなく暗示してゐるのだらうか。



## 読者の声

○

海彦

私は幼い子を持つ若い父である。コックをしてゐるが、時々、ブラツクの四つか五つになる子供達が「おさん何かちようだい」といつて裏口から覗く。不憫だとは思ふが、めつたに上げないことにしてゐる。自分の子が可愛いなら、他人の子供もおそろかには出来ない。「鐘が鳴ってから来なさいね、ナイスボーイだから」といつて追ひかへすのは私の苦しい愛の現れである。自分の子がどんな人間に成長してもかまはぬといふ親はあるまい。私達をもつと用心深く、幼き者の日々を、けがれなき魂を、見まもつてやらうではないか。それは子を持つ者の義務であり慈悲だと思ふ。

○

M.H生

便所の壁、一面、余白なきまでに落書でいっぱい。見苦しい外に感じが悪い。

一慈悲家出て壁にペンターを塗った。数日出

でずして更に落書は止まぬ。ペンター氏の心境や如何。

あゝ此の非人道的行爲、道德実践を以つて任ずる日本人の所作か？落書諸氏ヨ！徒らに日本精神云々呼号は禁物、道は遠きに非らず近きに在り。細心の注意を以つて、実践躬行、範を後輩諸氏に垂れ給へ。

○

一帰米

現在白井氏による社会、経済学の講義が行はれてゐますが、このやうな有意義な企てがどしどし行はれ、政治、思想、哲学、歴史、物理、化学、簿記、数学等各種の講座が我々帰米ニ吉の爲一日も早く開講されることを切望してゐます。

これにはホールの問題、講師の依頼等色々問題がありますが、戦後社会に出た時直ぐ役立つ日本人となる爲に何かまとまつた一つの専門のことを学びたいと思ひます。団体等の手によつて是非実現して戴きたいものです。



## 編輯後記



▲新年特大号として、この六号を古に出すことを得たのを先づ喜んでゐる。最初正

月直前に出すつもりでしたが、無味乾燥な當所より送られる最大の贈物にしたいからとの多方面の希望があつたので、期日を繰り上げ、十二月の中旬に出すことになった。編輯内容と共に、自信の持てる堂々たるものが出来上つたのも、健筆をふるつてくれた同人及び寄稿家の御蔭だと感謝してゐる。

▲特大号は今までにない倍数の頁になり、従つて紙に不足を来し、現金でなければ売らないと言ふ組合に事情を訴へて漸く出来上つたが、かゝる苦痛の後に生れたと思ふと、ことさらに可愛い気がする。

▲製本の時はブラックの子供達及び同人、友人の手を借りたが、皆眞面目にやつてくれた。茶菓

子を出す他、お礼も出来ない立場にあるが、彼等の眞摯な氣持に何時か報いる時もあると信じてゐる。

▲中には筆名を用ひてゐる人もあるが、知識階級の人々が表面に現はれないでも、「鉄柵」に多大の好意を示して下さるのを力強く感じてゐる。

▲日本語学校の「作文集」を見て、女生徒の作文の方が男生徒のより一般的にいいと思つた。

これは学校の問題であつて我々の関することではないが、面白い現象だと思つてゐる。中には市場靜の作文を読んで、十六オにしては珍らしい良い主觀をもつてゐると思つた。

▲鉄筆は加屋君にお願ひした。今後もずっと加屋君がやつてくれることになつてゐる。

▲投稿の場合、字は鮮明に、字数もきちんとしてくれたら、編輯する時に大変便利で大いに助かります。



鐵 柵 新 年 号



本号特價 三十五仙

昭和十九年十二月一日 印刷

昭和二十年一月一日 発行

発行者 鐵柵同人

編輯責任者 山城正雄

野沢襄二

河合一夫

鉄 筆 加屋良晴

発行所 鐵柵社

(加州ツリーレーキ1001B)



An Imagination Create  
But Benefits to Human Life  
through Materials.

Imagination lives beyond  
the Horizon.

Imagination discovers New Materials  
to do 誌雜人同湖嶺 New Jobs.

Imagination is <sup>the</sup> unrestricted.  
Creative use of Materials that gives  
Special Character.

Politics is the art of looking for  
Trouble: finding it everywhere,  
Diagnosing it wrongly, and applying  
Unsuitable remedies.